

# 羽曳野市内遺跡調査報告書－平成3年度－

羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 27

1992

羽曳野市教育委員会

# 羽曳野市内遺跡調査報告書 -平成3年度-

羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 27

1992

羽曳野市教育委員会

## 序

羽曳野市内には総面積の約1/5に及ぶ遺跡が確認され、本市の正しい歴史を理解する上で欠かすことの出来ないものとなっており、各遺跡での発掘調査成果は新たな歴史を私たちに伝えています。また、調査により確認された遺跡としては、古代史のみではなく古市遺跡や高屋城跡などの中近世における遺構の発見も相次ぎ、本市の歴史の幅の広さが窺われます。

今年度も社会事象を反映し、遺跡内における発掘調査をはじめ、周知の遺跡範囲以外においての試掘調査が多く行われました。これは、市内の生活基盤の整備に伴い、私たちの生活域がさらに広がっていくことによるものです。また、既存の生活域にあっても建替えや土地の有効活用による再開発事業なども多く、今まで手着かずの場所への開発が目立って多くなりました。

近年、全国的にも開発に伴う発掘調査によって今までにない発見が続き、新聞やテレビで大きく報道されています。反面、遺跡として残ってきた私たちの先人の足跡が破壊されていることも併せて知って頂ければと祈念します。

調査の実施につきまして、土地所有者をはじめ関係各位並びに関係機関のご協力を賜わりましたことを厚くお礼申し上げ、今後とも文化財保護行政に一層のご理解をいただけますようお願い致します。

平成4年3月

羽曳野市教育委員会  
教育長職務代理者  
教育次長 芝池信良

## 例　　言

1. 本書は、平成3年度に羽曳野市教育委員会が計画、実施した羽曳野市内における発掘調査報告書である。
2. 調査は、本市教育委員会社会教育課文化財保護係 主査笠井敏光・技術職員吉澤則男・伊藤聖浩・武村英治を担当者として、平成3年4月1日に着手し平成4年3月31日をもって終了した。ただし、本書には作成の都合上、概ね平成3年1月1日から平成3年12月31までの調査を報告し、年度内事業として可能なものは極力掲載した。
3. 調査の実施及び本書の作成にあたっては次の方々の参加を得た。（敬称略・順不同）  
(職員) 森田和伸・高野学・河内一浩・清水直子（嘱託）・小嶋亮（嘱託）  
(調査員) 古川明美  
(補助員) 植村康子・橋本達也・下山恵子・池崎祐司・前田尚希・原基・谷本良子  
井上美紀子  
(作業員) 采貴美子・渡辺広美・小林晴美・樽谷富美・大屋英子・小川公子・津村裕子  
澤田義明・飯村邦子・多田真弓・津村多美子・皆口貞子
4. 指導・協力をいただいた方々と機関は次のとおりである。記して謝意を表したい。（敬称略・順不同）  
大阪府教育委員会・藤井寺市教育委員会・羽曳野市史編纂室・株式会社・寿不動産㈱  
市川石油㈱・浅野祐晴・塩野悦子・タツミ開発㈱・大発産業㈱・福田建設㈱・麻野輝太  
羽曳野市下水道建設部・松木恵美子・羽曳野市教育委員会施設課
5. 土層・遺物の色調については『新版・標準土色帖』（農林省、農林水産技術会議事務局監修、1976）を使用し、全て目測で比定した。
6. 方位は基本的には座標北を指すが、一部磁北（M. N）を使用したものがある。レベル高についてはT.P.（東京湾標準潮位）値による。
7. 遺構の一部及び遺物写真は阿南辰秀・伊藤慎司氏にお願いした。
8. 本書の執筆は参加を中心として行い、その分担はそれぞれ明らかにし、編集は吉澤が行った。

# 目 次

序

例言

目次

市内遺跡分布図	1 ~ 2
文化財保護年報	3
調査成果一覧表	5
株山遺跡（第II期） 調査の契機と経過	（吉澤） 13
調査成果	15
まとめ	16
茶山遺跡－第1区 調査の契機と経過	（吉澤） 17
調査成果	18
遺物	20
まとめ	21
茶山遺跡－第2区 調査の契機と経過	（吉澤） 21
層序と遺構	22
遺物	24
まとめ	25
古市大溝跡－第1区 調査の契機と経過	（吉澤） 26
調査成果	27
まとめ	28
古市大溝跡－第2区 調査の契機と経過	（吉澤） 30
調査成果	30
まとめ	32
東阪田遺跡 調査の契機と経過	（吉澤） 32
調査成果	33
まとめ	34
高屋築山古墳・高屋城跡－第1区 調査の契機と経過	（武村） 36
基本層序	38
遺構	38
遺物	38
まとめ	38
高屋築山古墳・高屋城跡－第2区 調査の契機と経過	（吉澤） 39
層序と遺構	39
遺物	40
まとめ	41
野々上遺跡・野中ボケ山古墳 調査の契機と経過	（武村） 43
層序と遺構	43
遺物	47
まとめ	47
郡戸地区における確認調査 調査の契機と経過	（伊藤） 48
調査成果	50
恵我之荘遺跡 調査の契機と経過	（小嶋） 52
基本層序	52
遺構	52
遺物	54
まとめ	59
古市遺跡 調査の契機と経過	（吉澤） 61
層序と遺構	61
遺物	63
まとめ	70
参考文献	73
写真図版	76

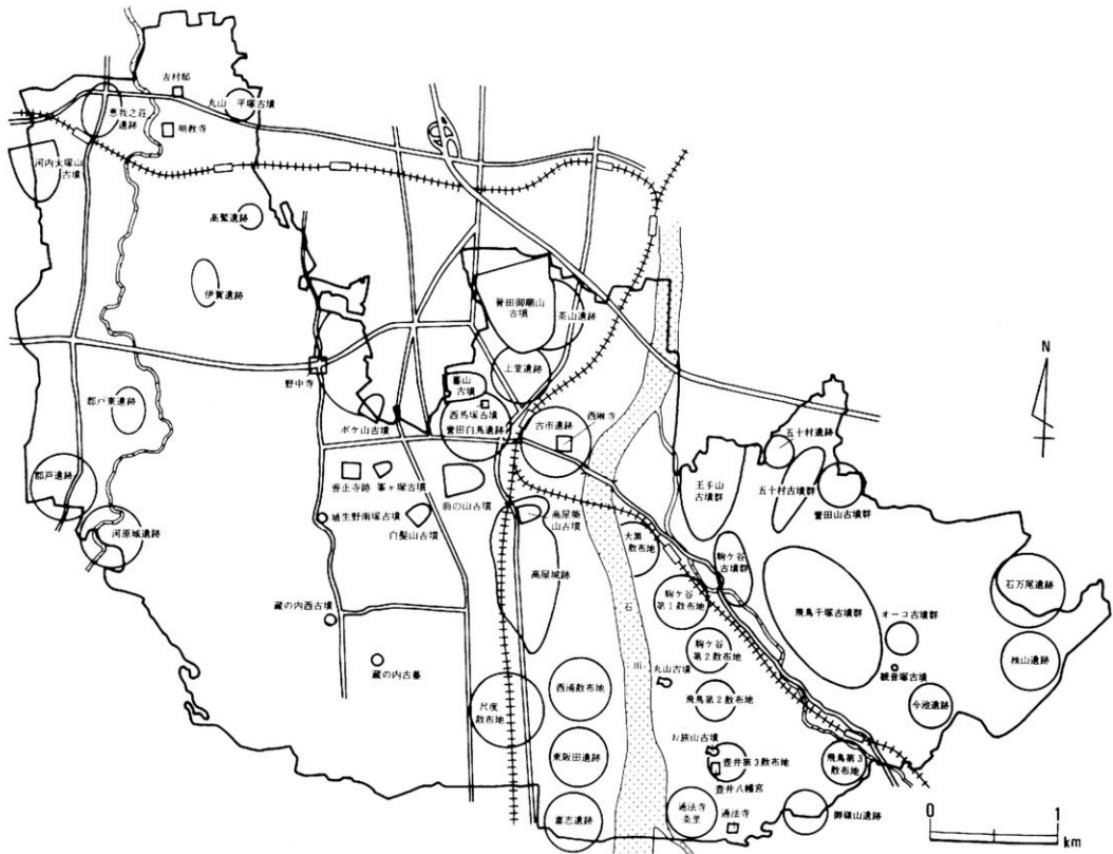


図1 遺跡分布図

## 文化財保護係年報

羽曳野市教育委員会社会教育課 文化財保護係が行った本年度の事業概要について報告する。

### 古市遺跡群発掘調査

本年度においては国庫補助対象事業である個人住宅の建て替えに伴う発掘調査は68件（『古市遺跡群III』を参照）、その他の開発行為に伴う発掘調査40件、試掘調査54件、立会調査11件を行うなど、昨年に引き続き開発に伴う調査が増加しており、特に遺跡範囲外における試掘調査が依然増加の傾向にある。

表1 発掘届出・試掘依頼書月別届出件数一覧

種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
発 掘	発掘調査	9	13	10	14	15	12	7	5	13	15	14	12	148
	立会調査	2	0	5	2	3	12	6	7	8	3	2	7	57
届 出	慣習工事	6	1	8	7	6	15	13	1	10	11	7	5	90
	（小計）	17	14	32	23	24	39	28	13	31	29	23	24	295
試 掘 依 頼	7	7	5	8	9	8	13	6	8	9	7	3	3	90
	計	24	21	37	31	33	47	39	19	39	38	30	27	385

### 普及・啓蒙

①陵南の森総合センターに併設されている「歴史資料室」での今年度テーマ展示は「文化財でつづる 羽曳野の歴史」と題し、身近に残る貴重な文化財を通して羽曳野市の2万年前からの通史展を実施した。家や生活用具、墓やまつりの道具、農具や武器など身の回りの品々や生活のやり方は時代とともに移り変わりながらも、市内での人々の生活は絶え間なく続いてきました。急速に街や世の中の姿が変化しつつある現代ですが、残された貴重な文化財を通して羽曳野の過去を振り返るとともに、改めて身近な文化財に目を向けてもらえるように工夫した展示を実施した。なお、展示に際しては解説書を作成し無料配付した。

②西浦銅鐸が重要文化財に指定されたことに併せて、以前に発行し品切れとなっていた調査報告書を新たに分析成果を補足した報告書として刊行し、販売した。

③第6回河内飛鳥の里 はびきのシンポジウムは、西浦小学校校舎建設工事中に偶然出土した銅鐸が学術性と優美性が認められ重要文化財に指定されたことを記念して9月23日に開催し、

約600名の参加を得た。テーマは『徹底討論－銅鐸－』と題し、銅鐸自体は祭器であると言わ  
れ実際に誰が、何のために、どのように使ったか、など多くの謎を秘めている。これらを解明  
するために銅鐸研究の権威の方々に講演と討論を行っていただいた。

内容は、笠井敏光「西浦銅鐸の周辺」、佐原 真氏「銅鐸とは何か」、春成秀爾氏「銅鐸のま  
つり」、水野正好氏「銅鐸の配布と分布」、  
近藤喬一氏「銅鐸と武器形祭器」の5つの  
講演と全員による討論を行った。このシン  
ポジウムに併せて特別展示として、茨木市  
東奈良遺跡出土の銅鐸鋳型、神戸市桜ヶ丘  
遺跡出土の絵画のある銅鐸、野洲町大岩山  
出土の銅鐸などを展示し、「兄弟銅鐸」や  
「三連式と畿内式銅鐸」の違いなどを判り  
やすく展示し、銅鐸について理解を深める  
ことに努めた。



写真1 シンポジウム・討論

④史跡 峯ヶ塚古墳の後円部埴丘部分についての発掘調査で、今まで想定していたものとは別  
の石室が見つかり、大刀などの武器や馬具、装身具など約3,000点以上の豪華な調査品の出土  
があった。これらを広く一般に公開するため現地説明会を行い、2日間で全国各地から  
見学者があり約10,500名に達し、マスコミにも大きく取り上げられることとなった。  
特に、説明については300インチのオーロ  
ラビジョンを配備したり、カラーパンフレッ  
トを配布するなど成果のわかりやすい公開  
に努めた。



写真2 峰ヶ塚古墳・現地説明会

#### 史跡等整備工事

①市内史跡の整備と活用を図る「歴史の散歩道整備事業」として、西浦銅鐸が重要文化財に指  
定されたことに伴い銅鐸出土地点に大型の解説板を設置し、カラー写真やイラスト、英文などを  
併記して指定記念のアピールに努めた。この他、見学者の多い「白鳥陵古墳」について大型  
の説明板を設置したり、道標5ヶ所を修理した。

また、史跡観音塚古墳への進入口は斜面が急で危険なため、手すりを修復して安全に見学で  
きるように整備を行った。

②昨年発掘調査を実施し、多くの成果を得た大谷古墳群について、基本計画に基づき本格的な移築工事や古墳整備を行い、スポーツ公園の開園に併せて移築・整備された古墳をを公開した。特に陶板による古墳群の模型や解説板の設置などを行い、調査成果を判り易く解説することに努めた。

#### 史跡峯ヶ塚古墳保存整備事業

①整備計画に基づき後円部墳丘部分について、盛土状況や葺石・埴輪列の構造を確認するための発掘調査を実施した。ところが、後円部墳丘部分に今まで想定していたものとは別の石室が見つかり、盗掘を受けていることが判明した。そのため、文化庁及び府教委と協議し、被害や残存状況を確認するためにさらに石室部分について継続調査を行った。これによって大刀などの武器や馬具、装身具などの副葬品が出土し、これらの保存処理や整理についての検討を行っている。

②後円部墳丘部分の発掘調査を実施しすると共に、土木工学的な視点から墳丘の保存修理設計のためにボーリング調査などを行い墳丘の土質や構造の検討を行った。

③全体計画における『資料館基本計画』を策定し、峯ヶ塚古墳や古市古墳群など古墳をメインテーマとした展示や体験学習ができる資料館の内容をまとめ、スタディ模型などを作成した。

#### その他

①羽曳野市遺跡調査会を組織し、大規模開発に伴う発掘調査などに迅速に対応できる体制を整えた。これによって、大阪府営住宅建設や府道拡幅工事に伴う発掘調査を本市が主体となって実施することとなった。

②府指定文化財である壺井八幡宮本殿修復工事の第2年次として、大阪府とともに事業推進のための補助を実施した。

③史跡地の公有化による現状保存と今後の整備に向けた買収事業として「史跡応神陵古墳外濠外堤」「史跡峯ヶ塚古墳」「墓山古墳」について実施した。

④上記の他に、市内の文化財保持者への助成、史跡清掃業務、史跡通法寺跡環境整備等を行った。

### 登報調查一覽表

番	調査期間	地 種 名	位 置	中 溝 命	規 格 (m)	周 边	備 考
18	3. 6. 13	普通白鳥跡	菅田3-87-2		1,386.40	寺宿所	中継地内にトレーンを設定し、重複範囲は、断面・平面既成。因材倉庫下部の、他の地物を含む位置を認める。また、地場・漁業署・土建部などの地物が見られる。このため、荷役施設なども行うが、設計監修事務所の隣となり。測量区を区張して測量を実施する。(詳細は別冊 地形・構造監査報告書-2付地内測量結果付)。
19	3. 6. 15	古市大湊跡	高塚2-407		227.95	美金所	
20	3. 7. 3	高塚跡	古市5-757-1 757-1-1 の一部		181.32	共同住宅	中継地の土地部分は、私道、廃道等の間に挟まれる。中継建物は土丘上に位置するのである。既成の土丘下に地盤の見えている部分もあるが、測量等を見られない。
21	3. 7. 4	浪江平坂 A支所	祇園 1113, 1118, 1128, 1136, 1137		36,284.27	末走2階裏	中継地内の内側部分を除くと、重複範囲の後、断面・平面既成する。既成範囲は土丘上に位置する。既成の土丘下に地盤の見えている部分もあるが、測量等を見られない。
22	3. 7. 6	高塚跡	古市 6-999-62		234.22	共同住宅	中継地の土地部分は、私道、廃道等の間に挟まれる。中継建物は土丘上に位置するのである。既成の土丘下に地盤の見えている部分もあるが、測量等を見られない。
23	3. 7. 8	恵我之庄跡	恵我之庄 5-145-2 の一部		123.96	共同住宅	中継地内にトレーンを設定し、重複範囲の後、断面・平面既成する。又、幅広く見てみると層分明かれり。土質と見らるる層は表土の下から順にわかる。地山と思われる層は茶黃褐色の粘土質である。測量等は見られない。
25	3. 7. 9	基山古墳	白鳥3-147		2,445.6	事務所	基山工事部が東側面開削後、断面・平面既成する。北西面には表土より下ぐらに地盤が使われるが、區域の外側面開削に担当する部分は、全て既成である。
26	3. 7. 17	大黒畠布地	大黒 482-1		435.31	倉 庫	中継地内にトレーンを設定し、重複範囲の後、断面・平面既成する。既成工事部は土丘下で、既成のもの1mほどでは既成部分が見られ、層序は表土の下には既成の層の厚さで地盤作業があり、既成が豊かな層。これは石川の花崗岩によるものと思われる。道端などは認められない。
27	3. 7. 17	大黒畠布地	川南2040-1の一部		495.0	倉 庫	基山工事部が東側面開削後、断面・平面既成する。北西面には表土より下ぐらに地盤が使われるが、区域の外側面開削に担当する部分は、全て既成である。
28	3. 7. 19	高塚跡	菅田 7-612-1		296.19	店 鋼	中継地部分の隣接面を既成する。既成部分は全て、土壌ないし表土で、道端・通路は見られない。
29	3. 8. 1	恵我之庄跡	恵我之庄 2-4-3		499.43	共同住宅	中継地内にトレーンを設定し、重複範囲の後、断面・平面既成する。既成部分は、所で既成地盤の外側粘土質地盤があり、土築壁や道路等が既成出で立。また、この下の茶黃褐色の地盤の上には底面約 0.25m の柱及び基礎 15~16.5m の穴孔の方を露出したため、車両等と連絡し、本構造を実現した。(詳細は別冊問題)
30	3. 9. 5	河原崎島跡	河原崎字高丹 728, 742-1		1,545.74	食 庫	中継地内にトレーンを設定し、重複範囲の後、断面・平面既成。所は3mに分かれ、上部から既成土・茶黃褐色・シルト層・灰白色地盤異質土となり。道端・通路等は見られない。
31	3. 9. 7	古市謫跡	古市4-11		1,168.0	駐車場	中継地内にトレーンを設定し、重複範囲の後、断面・平面既成。既成地盤の下に既成面が現れる。約 1m 下まで掘るが、全て地盤を剥いて既成である。
32	3. 10. 6	東屋崎跡	高塚山10-1100, 1101		1,441.10	倉 庫	中継地内に2ヶ所のトレーンを設定し、重複範囲の後、断面既成。向左側地と少し表土から約 5m で山地となり、表層・通路は見られない。
33	3. 10. 23	大黒畠布地	古市字アツミ 2017-1		1,438.99	工事場	中継地内において、建物基礎掘削及び作業場掘削部分を測量する。既成地盤は全て既成土で通路や通物は認められない。
34	3. 10. 31	古市謫跡	菅田 2-410		35.16	美金所	中継地内において、建物基礎掘削部分を既成地盤とする。既成地盤は全て既成土で通路や通物は認められない。
35	3. 11. 13	恵我之庄跡	恵我 5-485-7 名工場		1,721.43	事務所及び ショールーム	中継地内において、既成の事務室部分を既成地盤とする。上部約 2.5m では既成工事部開削時の通路土で、下部 0.5m は基盤移設土層である。道端・通路等は見られない。
36	3. 11. 18	古市大湊跡	高塚跡93-1		93.96	自動付住宅	中継地内にトレーンを設定し、重複範囲後、人柱による通路及び通物の確認を行う。基礎部分の高さは全て既成であり、支柱はない。
37	3. 11. 18	苦田白鳥跡	白鳥3-322		-	ガレージ	ガレージ構造に移し、既成範囲の中に既成面を認める。既成地盤下約 0.5m までの隙間で全て既成土の中に埋まる。
38	3. 11. 27	野々上桑林 仁葉野古墳 II. 28	野々上 3-502, 503-1, 504, 505-2		2,267.90	分譲宅	中継地内にトレーンを設定し、重複範囲後、人柱による通路及び通物の確認を行う。既成範囲の高さは全て既成であり、支柱はない。
39	3. 12. 15	大黒畠布地	川南2040-4, 6		392.77	総合2施設 事務所	中継地内にトレーンを設定し、重複範囲後、断面・平面既成。用地界下約 1.1m の既成地盤から約 0.5m までは既成土層。その下に厚さ約 0.25m の既成土がある。その下には赤茶褐色の地盤を確認する。この砂層は石川の花崗岩によるもので、道端・通路は見られない。

名	調査期間	道 線 名	位 置	申 済 者	面 積 (a)	用 途	備 考
10	3. 12. 24	新吉連跡	東坂口555-5		212.60	共同住宅	建物基礎部分を掘り下げる。削面表面約1.5mまで削除。上部約1.5mは赤粘土で、その下約1.5mは黄褐色の土である。以下は黄褐色粘土層と白粘土で、その間に赤色砂質土が入り込むことから植山の層理の可能性がある。なお、確定的な地山は掘り下げる停止面を見られる。土質質土層の小窓片1、出土。

### 試掘調査一覧表

名	調査期間	道 線 名	位 置	申 済 者	面 積 (a)	用 途	備 考
1	9L 1. 8	範囲外	伊賀 2-508-11		345.90	共同住宅	中耕地内にトレンチ 1 収容段設し、表面削除後、断面・平面削除する。削面表面下 0.6m は赤粘土で、以下は作土 (red soil) あり。この下に黄色砂質土の層理と白粘土となる。
2	9L 1. 16	範囲外	轟之内 193		996.893	新規建設	基礎削除部分について基礎削除後、断面・平面削除する。当該地は丘陵斜面を削り取りして平地地を造っており。剥離しても地山のみの層理で連續性を見られない。
3	9L 2. 7	範囲外	轟之内 9-301-1, 301-2, 302-1, 302-2		3,620.28	平屋住宅地	中耕地内の壁際部分にトレンチ 2 ポン所を設定し、重複削除後、断面・平面削除する。各起伏地表面から 0.2~0.3m まで削り下げる。切替地帯部は丘陵斜面を削り取られる。削面は作土と土質の層理を示すが、削面は出ししない。重複部は地山と上部灰土層の色相差より内が竹片出土するが、かなり離散している。
4	9L 2. 8	範囲外	宇治町 5-192-甲 153, 154 の各一部		725.11	垂床住宅	中耕地内において、施工工事 (底土) の層に新面削除する。全て地山 (淡黄褐色系の砂層) で、剥離・選別は見られない。
5	9L 2. 8	範囲外	古市字 750(1929~年 1929-2, 1931-1, 1932-1933, 1932-1)		951.18	宅地造成及び分譲住宅	中耕地を全て築土を行う造成工事で、地山への影響はない。現状表面 0.1~0.2m 削除下げる竹片砂 (強化) で、石川川底風化土と思われる。
6	9L 2. 18	範囲外	西原 5-234-1		695.84	個人住宅	中耕地内に 2 ポンのトレンチを設定し、重複削除後表面削除する。削面表面下 0.1m までは削除、上部約 0.3m までは削除及び裏側壁下の面下で地山となる。社方は当地表底 0.9m までは削り下げるが、全て造成土で地盤は埋設できなかった。地盤の層を含む赤色砂質土層が見られる。 ●無機質、瓦礫片が見出。●
7	9L 2. 29	範囲外	轟 8-109		1,091.11	共同住宅	中耕地内にトレンチ 1 ポンを設定し、重複削除後表面削除する。トレンチによって土地の層理は異なるが、赤粘土では、削面土・基底表面の赤粘土・黄褐色の地山という状況である。地山の一部に灰褐色砂層が入ったり、斜面の底面には灰褐色砂質土や赤褐色砂層が見出る。剥離・選別は見られない。
8	9L 3. 1	範囲外	轟 8-11-1		677.43	平屋販賣	トレンチ 4 ポンを設定し、重複削除の後、削面削除する。第 1・第 4 トレンチは、削作土及び灰土層を削除する。第 2・第 3 トレンチでは削作土及び灰土を削除するが、すぐに竹片出土するが、削面・選別は見られない。
9	9L 3. 8	範囲外	轟 8-7-1		2,305.6	倉庫及び 貯蔵・販賣場	計画面積に於いて 10m × 幅 10m × 高さ 2 m のトレンチを設定し、重複削除後、削面削除する。削面表面下 0.6m は赤粘土 (red soil) の下は、削作土の層理である (地表下 0.3m まで確認)。剥離・選別は見られない。
10	9L 3. 18	範囲外	大瀬 525-1		483.72	個人住宅	地盤削除部分削除し、表面削除する。削面高さ 1.5m の下には、地底や底土とともに地山が現れ、剥離・選別は見られない。
11	9L 3. 29	範囲外	轟 9 参考北端外 105-1		474.49	個人住宅	基礎削除時に立会し、表面削除する。地盤地盤は近辺までの水田地に約 1.3m の盛土を設し、建物を建設する。基礎削除面 0.6m 程度であり、地下への影響はない。
12	9L 4. 5	範囲外	古市 1362-1		352.32	個人住宅	地盤工事部分で地山の後、中耕地内にトレンチを設定し、重複削除の後、削面削除する。削面部分は削作土と地盤の層を示す。トレンチ部分は、削作土下には砂質土層があり、重複層は見られない。
13	9L 4. 8 9L 4. 9	範囲外	轟 8-丘 3-4-12		335.46	個人住宅	中耕地内に 1 × 1m のトレンチを設定し、重複削除後、削面・平面削除する。上部約 0.3m までは削作土 (赤褐色砂質土)、以下は都下り下げ削除と認めて地盤を立成し、灰褐色砂質土層で、灰褐色の粘土ブロックが入る。剥離・選別は見られない。
14	9L 4. 12	範囲外	野字二度田 100-1		2,042.95	事務所付倉庫	基礎工事に際し、掘削面を削除する。上部約 0.6m は赤粘土下約 0.3m までは灰褐色の地底 (灰褐色砂質土) が見られる。剥離・選別は見られない。
15	9L 4. 15	範囲外	轟 8-2-4-1		218.43	個人住宅	基礎削除下 0.6m まで削除の上にて削り下げる。上部約 0.4m は削作土 (赤粘土) で、削面・表面削除する。下部は灰褐色砂質の粘土層が露出される。剥離・選別は見られない。
16	9L 4. 25	範囲外	ばびきの 5-108-6		476.19	個人住宅	現地は削除下 0.6m まで削除の上にて削り下げる。上部約 0.4m は削作土 (赤粘土) で、削面・表面削除する。下部は灰褐色砂質の粘土層が露出される。剥離・選別は見られない。
17	9L 5. 16	範囲外	轟 6-12-129		1,593.705	共同住宅	中耕地内にトレンチ 4 ポンを設定し、重複削除後、削面・平面削除する。削面に上部造成土・削作土・中耕地用砂質土の地盤で、剥離・選別は見られない。

区	調査期間	調査名	位置	半 墓	規模 (m)	周 边	特 記
14	91. 5. 23	範囲外	鳥足 5 - 250 - 2 ○ - 85		121.42	個人住宅	地向かい事は、施設存在にも5mの距離を保つ事を行う。隣接部分について割合した時点では立会調査を行う。範囲はは現本園面下、0.25m程であり、アゲハチ及び施設内に枚なり、地下への影響はない。
15	91. 5. 29	範囲外	鳥足 5 - 170 - 4, 5, 171 - 1		945.97	宅地造成	
20	91. 5. 30	範囲外	高麗 10 - 23 - 1		136.78	共同住宅	中耕地内にトレンチを2ヶ所を設定し、重機掘削機、折衝・平面調整機とも、覆土は少く砂土・泥炭灰白色土、泥質灰色粘質土となる。隣接はなく、遺物は上部断面及び軸跡が数点見られる。
21	91. 6. 21	範囲外	鳥足 3 - 18 - 1		4, 858.00	田舎	中耕地内にトレンチを2ヶ所を設定し、重機掘削機、折衝・平面調整機とも、約1.5mの幅で耕作土・田舎地が見られる。約2.5m距離を保つ事が出来て、遺物は見られない。
22	91. 7. 1	範囲外	学園町 3 - 138 新規開拓		103.255.91	校舎・宿泊	中耕地内に約1.5mまで掘りかれた新庄を確認する。全て透水土石しくは地主で、遺構や遺物は見られない。
23	91. 7. 12	範囲外	高麗 10 - 500 - 2 507 - 1		407.04	共同住宅	中耕地内に約1.5mまで掘りかれた新庄を確認する。全て透水土石しくは地主で、遺構や遺物は見られない。
24	91. 7. 15	範囲外	西浦 4 - 855 - 1 ○ - 1 住 1 番		416.30	共同住宅	中耕地内にトレンチを2ヶ所を設定し、重機掘削機、折衝・平面調整機とも、約1.5mまで掘りかれた新庄を確認する。覆土は、透水土・田舎地・泥炭白灰色土層・泥質黄褐色砂質土の地山となり、全て水平堆積である。遺構・遺物は見られない。
25	91. 7. 16	範囲外	駒ヶ谷 4220		631.00	農業用仓库	中耕地内にトレンチを2ヶ所を設定し、重機掘削機、折衝・平面調整機とも、約1.5mまで掘りかれた新庄を確認する。透水土・田舎地の堆積を行つ。遺構・遺物は見られない。
26	91. 7. 17	範囲外	高麗 5 - 11 - 1 10 - 11		902.88	兵庫住宅	中耕地内にトレンチを2ヶ所を設定し、重機掘削機、折衝・平面調整機とも、田舎地の中央で溝が有る。表面は(木)分離する。透水土・田舎地・泥炭白灰色土層・泥質黄褐色砂質土の地山となり、全て水平堆積である。遺構・遺物は見られない。
27	91. 7. 22	範囲外	羽曳ヶ丘 4 - 6 - 5 - 7		511.185	個人住宅地盤	建物基礎保証時に断面を乾燥する。全て透水で、遺構・遺物は見られない。
28	91. 8. 5	範囲外	秋ヶ谷 1370 - 1 1372 - 2		356.32	個人住宅	鉄筋工事時に、鉄筋・鉛垂線を設置する。現地底面下、0.7mの深さまで掘り下げられているが、上から透水・透水土・田舎地・田舎地で、地盤が固まらないし、透水土(黄褐色細粒土質土)である。透水下の黄褐色土質土は地山で見出される。遺構・遺物は見られない。
29	91. 8. 5	範囲外	野 602 - 110 - 1 604 - 1 - 4, 605 605 - 617 - 1, 69		476.12	道路・埋立地盤 (専用住宅 (P))	道路部分にトレンチを2ヶ所を設定し、重機掘削機の後、折衝・平面調整機とも、透水土・田舎地の上部の砂質土である。トレンチ底面下で透水地盤構造1つが確認され、透水土から土柱状の透出(透析輪柱)が見出される。(詳細は本項後4段)
30	91. 8. 21	範囲外	駒ヶ谷 1 - 127 関西電力 羽曳ヶ谷営業所		5, 425.38	専務所地盤	中耕地内にトレンチを2ヶ所を設定し、重機掘削機の後、折衝・平面調整機とも、透水土・田舎地の上部の砂質土である。透水下では透水土となる。遺構・遺物は見られない。
31	91. 8. 23	範囲外	羽曳 5 - 7 - 7 - 11		330.57	個人住宅	トレンチ2ヶ所を重複開削した後、断面観察する。透水土及び透水土の下はすぐに地山となる。透構・遺物は見られない。
32	91. 8. 25	範囲外	高麗 5 - 10 - 105 - 2		512.81	駒ヶ谷	トレンチ2ヶ所を設定し、重機掘削機の後、折衝・平面調整機とも、透水土・透水土・田舎地の上部の砂質土である。透水下には灰褐色・茶褐色の粘土層の地山となる。遺構・遺物は見られない。
33	91. 8. 17	範囲外	鳩生野 805 - 1		21, 981.89	老入・ 母屋又は 母屋の 増築	中耕地内においてトレンチを2ヶ所を設定し、重機掘削機、折衝・平面調整機とも、透水土・田舎地の下がり下りと、盛められており、透水下では透水土である。透水下の透出がある。透水下には透水土・透水土・透水土である。透構・遺物は見られない。
34	91. 8. 17	範囲外	羽曳 5 - 4 - 2 - 7		326.86	個人住宅	中耕地内において、透水土・田舎地の透出がある。透水下では透水土である。透水下の透出があるが、全て透水・透水土である。
35	91. 8. 18	範囲外	西浦 5 - 10 - 1, 5 - 5		744.05	駒ヶ谷	中耕地内において、日用品店西側地盤に新型敷設する。屋敷状況は、透水土・黄褐色砂質土・灰質灰白色土・泥質褐色粘土の地山の水平堆積である。遺構・遺物は見られない。
36	91. 8. 19	範囲外	西浦 5 - 9, 5 - 1		975.15	駒ヶ谷	中耕地内において、日用品店西側地盤に新型敷設する。屋敷状況は、透水土・黄褐色砂質土・灰質灰白色土・泥質褐色粘土の地山の水平堆積である。遺構・遺物は見られない。
37	91. 8. 20	範囲外	羽曳ヶ丘 3 - 18 - 12		365.61	個人住宅	中耕地内において、鉄筋油圧掘削機にて、断面観察する。透水土は鉄筋地盤であり、透水土は耕作土・透水白灰色土・透水白灰色土・透水白灰色土である。透構・遺物は見られない。
38	91. 8. 25	範囲外	伊賀 1 - 255 - 1		725.78	倉 库	中耕地内にトレンチを2ヶ所を設定し、重機掘削機の後、断面・平面観察する。透水土は鉄筋地盤であり、「透かみ耕作土」・灰質灰白色土・透水白灰色土・透水白灰色土の地山となる。透構・遺物は見られない。
39	91. 8. 26	範囲外	野 603		2, 447.17	共同住宅	中耕地内にトレンチを2ヶ所を設定し、重機掘削機の後、断面・平面観察する。透水土は鉄筋地盤であり、「透かみ耕作土」・灰質灰白色土・透水白灰色土・透水白灰色土の地山となる。透構・遺物は見られない。

No	調査期間	調査名	位置	申請者	規模 (m)	用途	備考
40	91. 9. 10 25	範囲外	羽曳ヶ丘 5-1-5		327.78	個人住宅	中津地区内において、複数取り扱いの地主と計画基盤部時刻に断面観察する。全く造成土（生土）である。建物・遺物は見られない。
41	91. 10. 15	範囲外	高架 2-405 -1, -3 -5の 85		955.16	道路位置変化	中津地区はすでに下水・水道・ガス管の工事の済み、これを避けた2×筋のトレント設定を行ない、密度調整のため、平面測量する。旧田代土上造成土、油の下に赤色黄褐色を有する地山をもつし、油まで確認する。
42	91. 10. 16	範囲外	野 59, 61, 64 の 各一部		531.54	直角	中央地内に、盛土をした上にぐるり石を置いて基礎工事をため、現状跡のみを行う。
43	91. 10. 22	範囲外	西端 3-235		436.69	直角	中津地区内において、複数基盤割合に断面・平面観察する。新面観察によると、アスファルト舗装の下は造成土で、その下は約 0.2m の油層で、多くの透水孔を有する。なお、アスファルト舗装以前まで確認していた際の油層は、現状では大きさはほぼ 1.7m である。
44	91. 10. 23	範囲外	大尾 2H-1		35, 688.21	工場増築	中津地区内において、複数基盤割合に断面観察する。現地表面下約 1.5m 層度の基盤で、全て造成土である。
45	91. 10. 31	範囲外	羽曳ヶ丘 3-4-6		318.13	個人住宅	中津地区内において 1×1 台のトレントを設定し、複数基盤の深さをあわせて掘削を行う。全て造成土である。
46	91. 10. 31	範囲外	羽曳ヶ丘 2-3-36		33.37	個人住宅	中津地区内において、複数基盤割合に立合する。高崎は既知地表面以上に構造するあたり、工事に施し支障なし。
47	91. 11. 8	範囲外	羽曳ヶ丘 1-7-69, 2-291-2		311.68	個人住宅	基礎割合の深度は全て造成土である。
48	91. 11. 15	範囲外	樺山 285-1		327.27	住宅増築	中津地区内にトレントを設定し、塗膜剥離の状、新削・平底敷装、既知地表面下約 0.4m 調査する。上層は赤色黄褐色造成土、下層は作成土と表土上で、透水・透水性は見られない。
49	91. 11. 23	範囲内	羽曳ヶ丘 3-24-1		292.22	個人住宅	中津地区内に電鋸・人手鋸にて立合し、断面観察する。現地表面下約 0.6m まで掘り下げる。上層は 0.2m は作成土層、下層 0.1m は系糞色砂利地帯を表すが、地山層の可能性がある。
50	91. 12. 3	範囲外	野寺アユト 6H-1 (実験戸地)		459.502.74	ゴルフ練習場	中津地内にゴルフ練習場内において調査する。中津地内池の角、漏水が発生し、ゴルフ練習場では、透水・透水性は確認せず。
51	91. 12. 9	範囲外	野 51-1 の一部		443.57	半蔵二場	中津地区内は盛土の上に基礎を施すため、地下への影響はない。
52	91. 12. 12	範囲外	尺度 285		456.79	個人住宅	中津地区内において基礎工事時部分の新面観察を行う。基礎・現地表面より上げ、部分的に底・低位置には露土を行なめた段階での調査はない。
53	91. 12. 18	範囲外	学園前 1-224-402 433-394		312.05	個人住宅	中津地区内にトレントを設定し、香椎駅前駅、新町・平底敷装、中津地内に既知地表であり、層位は若干、灰色砂利上層、再び褐色砂利層、青灰色砂利質土となる。透水・透水性は見られない。
54	91. 12. 24	範囲外	吉市 1307, 1315-1, -2		1, 256.34	通路内 密着地盤	中津地区内にトレントを設定し、重慶御跡より後、新削・平底敷装する。中津地内に既知地表であり、層位は若干、灰色砂利上層、再び褐色砂利層、青灰色砂利質土となる。透水・透水性は見られない。

### 立会調査一覧表

No	調査期間	調査名	位置	申請者	規模 (m)	用途	備考
1	91. 2. 5	野中市駅	野々上 5-230-9 桃 1 葉		81.21	個人住宅	基礎基盤開削時に立合し、新削・平底を観察する。全て既知土で、鉛筆頭なども耕作土上面がごぼ入る程度である。透水・透水性は見られない。
2	91. 7. 5	高山跡	磐田 1-1-2 ～1-5 光地		—	—	福地に施して立合し、断面・平面を観察する。全て機械土であり透水・透水性は見られない。
3	91. 7. 8	古市大廣跡	野々上 5-242-52		52.31	個人住宅	中津地区内に既知工事中に立合し、新削・平底観察する。現地表面下約 0.6m の新削。上層 0.2m では既知土ではない。透水性は、下層は 0.4m の既知土と呼ばれる。透水・透水性は見られない。
4	91. 8. 22	三ツ塙古墳	羽ヶ谷・谷・24-2 公園内	羽曳野市長	—	24-2 公園裏石 止留排水渠	三ツ塙古墳の西側に既知地表までの段階で行なう。上層 0.2m は造成土土で、下層 0.3m は光地である。現地を立合する透水・透水性は見られない。
5	91. 9. 20	古市大廣跡	磐里 3-1-13		—	窓井設置工事	窓井設置工事に付いて立合し、新削観察。現地表面下約 1.3m までは土層状況は上層の物までは機械土。下層 0.3m は赤色砂利地盤土となる。透水・透水性は見られない。
6	91. 10. 23	三ツ塙古墳	羽ヶ谷・谷・24-2 公園内	羽曳野市	—	古墳周辺	三ツ塙古墳の西側に既知地表までの段階で行なう。地盤の下層に接する赤色砂利地盤土に接する赤色砂利地盤土に接する赤色砂利地盤土である。既知地盤の透水・透水性は見られない。
7	91. 12. 4	古市大廣跡	磐里 3-8-12 4-5		—	瓦ス管敷設	現地の道路から約 1.1m の範囲下げる。上層 0.2m までは透水透水性の層とし、その下は既知地盤の透水・透水性の層とし、その下は既知地盤の透水・透水性の層となる。





## 株山遺跡

株山遺跡は羽曳野市飛鳥に所在し、近隣には石万尾遺跡・ドンズルボー遺跡・春日山第1散布地などのサヌカイトを採取する原産地および石器製作遺跡とされる二上山北麓遺跡群が広がる。当該地は二上山の北西部、奈良県との境にあり標高235m以上であるが、現状では採石場となり山々は大きく掘削されている。なお、当遺跡の名称は以前は石万尾遺跡第1地点であったが、帝塚山大学が調査した昭和55年以降は株山遺跡と呼称されるようになった。

過去の調査としては、昭和55年～56年に帝塚山大学によって山頂断崖部付近において実施され、サヌカイト原石を採取した採掘坑やサヌカイト石器製品などの遺物が出土した。

続く昭和58～59年には、同所の西斜面側を大阪府教育委員会が調査を実施し、縄文～弥生時代にわたる焼上坑・落とし穴などの遺構と石器を確認した。また、奈良時代の土師器・須恵器、瓦器といった新しい時代の土器なども出土している。

これらの成果から当遺跡は、主として旧石器～弥生時代の石器石材採掘場所と考えられるが、それ以降も何らかの活動を示す複合遺跡であることが確認されている。

### 調査の契機と経過

平成2年10月29日付け（羽教社第886号）で、羽曳野市飛鳥927番地の一部について昨年に引き続き、12,462m<sup>2</sup>を対象とした採石事業実施に伴い発掘届出書が提出された。当該地は、昨年度の調査地南側の谷筋部分である。昨年度の調査では、山頂に近い部分ではサヌカイト剝片などの集中部が認められたが、表土直下には岩盤若しくは流上が堆積しているのみで、遺物包含層や遺構は検出されなかった。



図2 遺跡内位置図



図3 調査区位置図

今年度は第2次調査として南側の谷筋を中心とする部分について調査を実施した。なお、この地点は、原石採掘土坑群が確認されたところから南東100m以上離れた所で、尾根が下降する所と深い谷地形となる部分である。

調査は平成3年3月4日から年3月28日まで、幅2mのトレンチを6ヶ所設定し、重機掘削の後に断面及び平面を精査し、遺構などの検出に努めた。トレンチは総延長286.3mに達した。

### 調査成果

調査は、トレンチを重機で現地表面下約0.3~1.3mの深さまで掘削した。断面観察の結果、表土や流土が0.2~1.2m程度堆積する下層は、すぐに安山岩の岩盤となり一部露頭するところもある。岩盤の上層はもろく、バイラン土状態になっている。

山頂に近い斜面では表土が薄く、既に谷下へ流れ出している。また、斜面が急なため中程でも余り堆積土がなく、堆積した層においてもサヌカイトの剝片はほとんど含まれていない。

一方、緩斜面となる谷の中心部では流土が厚く堆積し、流土下層と地山面近くでは人頭大かそれ以上ある大きさのものや板状に剥離した安山岩が転げ落ちた状態で密集して出土している(図版一)。これらの石材は質の悪いサヌカイトでもあり、いずれも人工的な割れがあるものは確認できない。

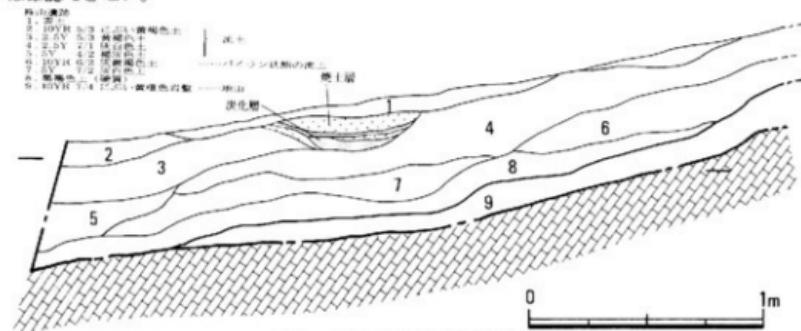


図4 第4トレンチ西壁断面図

第1トレンチと第4トレンチの合流部分の尾根側では、表土及び上層流土の下に炭化物を含む遺構状のものが確認されたため、調査区を一部拡張して平面的に調査を行ったが、長楕円形の落ち込みとなった。出土遺物などが認められないが、土質の状態が緩く浅いことから比較的新しい時期のものと思われる。

また、この下層の流土内から土師器の小片が2点出土しているが、時期を確認できるものではない。

## まとめ

今回の調査においても第Ⅰ期と同様にサヌカイト原石の採掘坑は認められなかった。また、尾根側では傾斜が急な地形であり堆積層が薄く岩盤に近い状態である。谷部分については流土が厚く堆積し、転落した安山岩原石が集中する部分があるが石器生産に伴うものではない。

そのため、昨年度及び今年度に調査を行った申請場所については遺構や遺物包含層が確認されず、一部を除いて採石業務に着手が可能と判断される。しかし、昨年度に協議しサヌカイト原石や剝片が多数集中して堆積している地点については、周辺の地形も含めてできる限り広い範囲で現状保存を図るように申請者に対して協力を求める必要がある。

## 茶山遺跡

茶山遺跡は菅田御廟山古墳の東側一帯に広がり、南部は上堂遺跡が隣接し、東限は石川氾濫原までの中位段丘上に広がる南北580m・東西320mの範囲を有する。また、北は藤井寺市・土師の里遺跡へと続き、遺跡の性格が同じであることを考えれば一連の空間である。

遺跡内には栗塚古墳などの菅田御廟山古墳の陪冢と考えられる古墳が点在し、その内容の豊かさが知られている。従来は、(1)「円筒埴輪棺」を使用する土塙墓が密集している。(2)奈良時代前半には、土師器を中心とし土坑内に多量埋納する。(3)土馬などの出土が著しく多く祭祀的色彩が強い、ことをはじめ古墳時代から奈良時代を中心とする遺跡と考えられていた。

しかし、昭和60年度の府教委及び昭和63年度以降の市教委による調査で14世紀から16世紀の園池状遺構・井戸・集石土坑群やこれに伴う多数の遺物が出土することが確認されており、一帯は奈良時代に終焉することなく、その後14世紀代に再び復活した複合遺跡であることが判明している。

本年度は当遺跡内で4箇所の発掘調査が実施された。そのうち大きな成果が得られた2ヶ所について概要を記す。



図5 遺跡内位置図

### 第1区

#### 調査の契機と経過

当遺跡内の菅田6丁目599番地4号他3筆において、鉄骨3階建ての社宅建設工事に伴って平成2年11月30日（羽教社第1036）に「発掘届出書」が提出された。当該地が、茶山遺跡及び

二ツ塚・東馬塚古墳にも該当することからその遺跡保存について申請者と協議を実施した。

しかし、当該地における遺構の遺存状況などが不明であり、現状保存の範囲等の基礎資料が少ないとことから事前の確認調査と実施することとなった。

当該地隣接地での過去の調査としては、沓田中学校グランドのフェンス工事に伴い発掘調査を行った際に、東馬塚古墳の墳丘や周濠が確認され古墳の墓域がさらに外側の一辺約35mまで広がることが判明した。旧地図では西に隣接する二ツ塚古墳を含む沓田御廟山古墳の測量図（昭和3年）によると二ツ塚古墳の北側にため池があり、さらに、東側には等しいはばで畦畔がみられる。また、東側の発掘調査においても濠跡が認められる。

これらのことから、二ツ塚古墳は北側と東側に幅約15mの周濠を巡らせており、現状ではこの部分が湿地として遺存している。

このような周辺での状況を踏まえ、平成3年1月24日から同月29日まで現地調査を実施した。なお、この現地調査費用は全て申請者の負担による。

#### 調査の成果

調査区8ヶ所を設定し、表土や造成土を重機で除去した後、断面及び平面を精査した。なお、検出した遺構の多くについては掘削は行わなかった。各調査区によって層序や遺構の内容が異なるため各調査区ごとに概要を記す。



図6 調査区位置図



図7 帝室林野局測量図

**第1調査区** (2×2.4m) 現地表面下0.2mまでは表土及び盛土でこれを除去すると土器や埴輪片が入る包含層が0.2~0.5m堆積している。この下は疊層の地山となる。遺構としては明確なものは検出されなかったが、ここは「東馬塚古墳」の外堤部分とみられ他に比べ地山が高くなっている。埴輪2片が出土した。

**第2調査区** (2×1m) 重機での掘削当初から湧水が著しく、壁面の崩壊のためすぐに埋め戻す。

**第3調査区** (4×2m) 地表面から近年の搅乱が深く、0.8mまでは廃棄物があり、この下に約0.2m厚みで奈良時代の土器を含む包含層が残存していた。この包含層の下は黄色土の地山面であった。遺構としては、中世の暗渠と思われる溝と奈良時代に掘られたと考えられる土坑が数箇所検出された。

**第4調査区** (2.1×3.9m) 地表面下0.15~0.2mまでが表土でこの下に包含層が0.5~0.6mの厚さで堆積している。この層には奈良時代の土器や埴輪が多数含まれていた。この包含層を除去すると疊層地山となるが、この層を掘り込んだ土坑や柱跡が多数検出された。

**第5調査区** この調査区においても近年の搅乱が著しく0.6m程がゴミの投棄や盛土であった。この下には0.1~0.15m幅で包含層が残存しており、以下は疊層の地山となり、この面に3ヶ所の遺構が確認された。

**第6調査区** (1.9×4.8m) 表土層0.2~0.25mの下に、1.0~1.5mの包含層が厚く堆積しており奈良時代

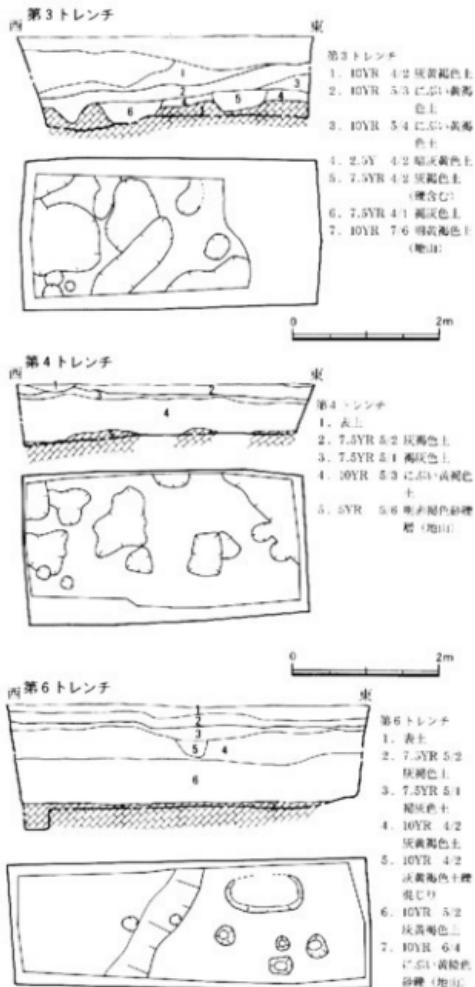


図8 平面及び断面

の土器が多数含まれていた。これらの包含層を除去すると黄色系土の地山層となり、遺構が数箇所検出された。柱穴は約1.3mの等間隔で東西方向に並んでおり、建物柱列若しくは柵列と思われ、更に延びる。また、西に向かっての落ち込みがあり、多数の土器が入っていた。

第7調査区 (1.6×4.2m) 表土は0.2~0.5mあり、これを除去すると包含層が現れる。この包含層は0.4~0.6m堆積し、下層には橙褐色砂質の地山となる。ここに柱穴1ヶ所と土坑1ヶ所が確認された。

第8調査区 (2×4 m) 湧水が著しため断面の監察後直ぐに埋め戻した。

### 遺 物

埴輪（円筒埴輪・形象埴輪）、土師器（高杯・杯）、須恵器、瓦質土器などが遺物包含層から出土している。特に第6調査区からは多くの遺物が出土している。以下、図化可能なものについて掲載し概要を述べる。

1は高杯の脚部で中空のものである。残存部で裾の開きが認められることから短い脚のタイプである。また、外面は面取りされた多面体となる。2は瓦器碗の底部で、断面三角形の外側に張る高台が付く。内面の見込み部分には格子目の暗文が施されている。3は須恵器壺の底部

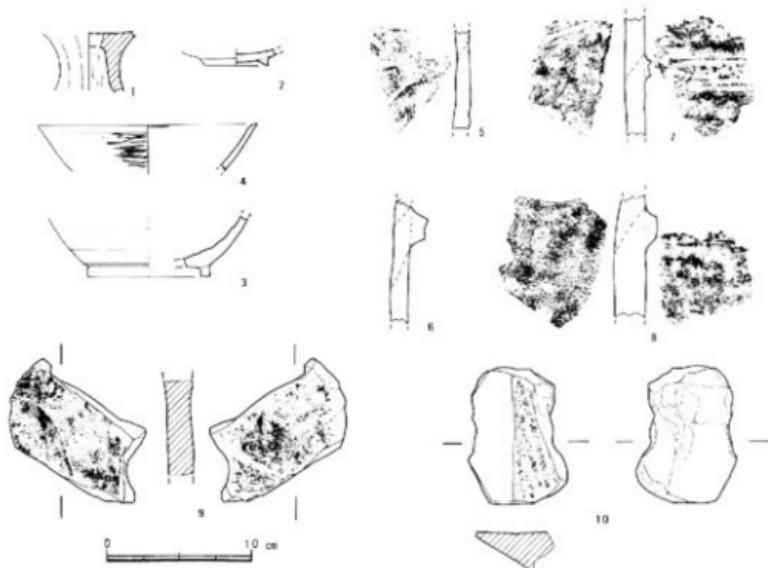


図9 出土遺物

で、内面にはロクロナデによる成形が認められる。4の瓦器椀は復原口径14.9cmを測り、口縁端部が上外方へつまみ上げておさめる。外面には丁寧な暗文を施す。

5の外面は丁寧なナデで整形し、赤色顔料が全面に塗られている。内面には粘土難ぎの痕が残る。薄手で堅緻な作りから形象埴輪の可能性が考えられる。6は円筒埴輪で高いM字形のタガを有する。外面は二次調整にB種ヨコハケを、内面は横方向のハケによる調整を施す。7の円筒埴輪も外面の二次調整にB種ヨコハケを施し、赤色顔料を塗布している。8は器壁の厚いもので、外面の磨耗が著しい。

9は蓋形埴輪の立ち飾りで線刻による装飾が認められる。10は盾形埴輪で、外面には線刻が残る。裏面にはタガ部から剝離した痕跡がある。

埴輪に関しては、外面調整やその焼成などの特徴から菅田御廟山古墳と同じタイプと考えられる。土師器や須恵器は、平城宮II～III期に相当する時期のものと考えられる。また、瓦器椀については、尾上編年のII～III～II期の所産とみられる。

## まとめ

以上のように、申請地はその立地に相応しく全面的に遺構及び包含層が存在しており、時期的に奈良時代を中心として古墳時代や中世（鎌倉・室町時代）まで幅広く存在する。当遺跡の時期が古墳時代から奈良時代であることに加え、近年の周辺部での調査において中世まで継続することが判明しており、今回の調査においてもこの時代まで継続することが認められた点は大きな成果である。

これらの成果をもとに、工事計画の再検討若しくは本格的な発掘調査によって破壊される部分の記録保存の必要性を申請者へ回答し、再度協議を行った。

## 第2区

### 調査の契機と経過

遺跡内の菅田6丁目652番地3号他4筆において、ガソリンスタンド改築に伴って平成2年3月19日（羽教社第1461）で「発掘届出書」が提出された。当該地周辺では、表上下の浅い所で遺構が確認されているため、建物解体時から隨時立会い、残存状況を確認した。その結果、既設タンク部分や建物部分では既に遺構や



図10 調査区位置図

遺物包含層は削平されていたが、今回新たに建物が計画された部分では削平を免れ埴輪や奈良時代の土器が入る包含層が現地表面下約0.1mで確認された。そのため、申請者や施工主と協議の結果、設計変更などの現状保存が不可能なため、掘削部分について発掘調査を実施することとなった。

調査は平成3年2月2日から同月5日まで現地調査を行った。なお、この現地での調査費用は全て申請者の負担による。

#### 層序と遺構

現地表面及び解体後の廃土層が約0.1~0.15m堆積しているが、これを除去すると茶褐色の遺物包含層が堆積しているが、部分的には表面に露頭している。この包含層は既設工事等によって削平を受け調査区北側では認められないが、調査区南側では約0.2mの層厚で堆積する。以下は橙褐色の段丘疊層の地山面となる。

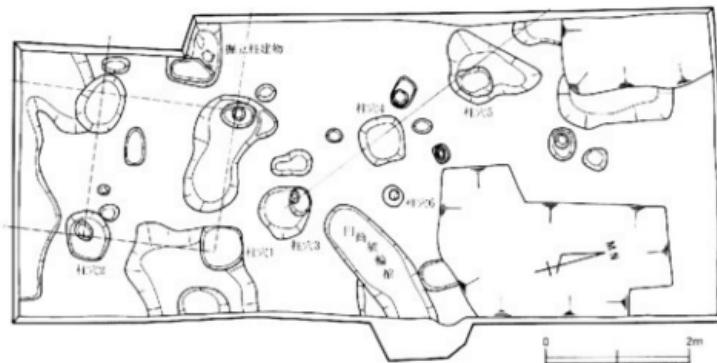


図11 平面図

遺構はこの地山面で多数検出した。主なものは、円筒埴輪棺1基・掘立柱建物1棟・土坑5箇所・方形の掘り方を有する柱穴4箇所・円形の柱穴数箇所である。

**円筒埴輪棺** 長方形の掘り方を有し、長さ2m以上×幅0.75mで、深さは検出面から約0.1mと浅く、上面は大きく削平を受けていた。調査区を拡張して遺構の検出に努めたが既に搅乱されていた。

使用された埴輪は、接合の結果、主体部として円筒埴輪を据え、両端は朝顔形埴輪の朝顔部分2個体で塞いでいたと考えられる。なお、精査したが棺の内外とも副葬品は認められなかつた。

**掘立柱建物** 調査区南側では、方形の掘り方を有する柱穴 4箇所が南北約1.8m・東西約2.0mの間隔で存在しており、総柱のため倉庫跡と考えられる。柱穴 1・2 は 1 辺約0.6m の方形の掘り形を有し、直徑0.16~0.2mの柱痕跡が認められる。調査区内では継続する柱穴跡はなく、調査区外へのびるものと思われる。

**柱穴群 1** 建物を復元できた以外に方形の掘り方をもつ柱穴 3~4 が、直線的に1.5mの間隔を有して並ぶ。一部他の遺構と重複するため平面形は不明確であるが一辺約0.6mの掘り形を有する。

**柱穴 6** 直徑0.3mで、埋土内に土師質小皿の完形品が納められていた。同規模の円形柱穴は数箇所検出したが、建物を復原するには至らなかった。

この他の遺構としては、土坑が5ヶ所確認された。平面形が不定形であり、出土する遺物が細片のため、時期やその性格は不明である。

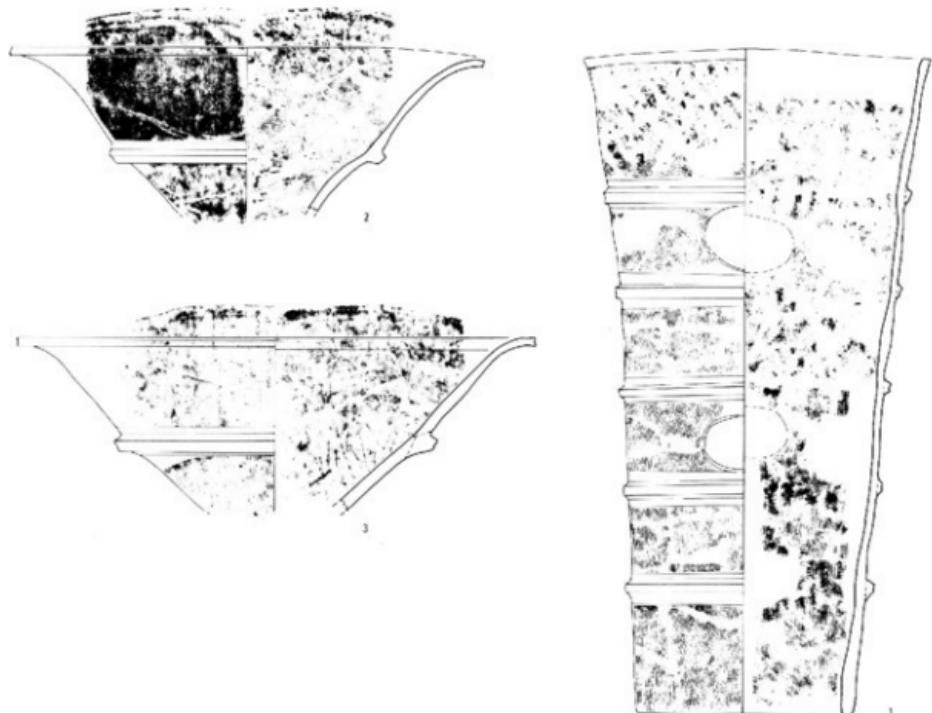


図12 出土遺物・埴輪 (S=1/6)

## 遺物

上層では、既設建物による搅乱及び削平を受けていたが、包含層及び遺構から円筒埴輪をはじめ土師器（杯・高杯・皿・盤・把手部）、須恵器（甕・杯など）、土師質小皿、瓦器椀、瓦質土器（三足鍋脚部など）、土師質土器（火合など）、備前焼など古墳時代から中世にいたる遺物が出土している。図化が可能なものを掲載し、概要を述べる。

1は円筒埴輪で、棺の主体部に転用されていたものである。高さ69.3cm・口縁部直径36.0cm・底部直径22.4cmを測る。5条の低い台形を呈するタガを有し、2段目と4段目に対峙する方向に円形の透かしを穿つ。外面は縦方向の一次調整で、内面は縦方向のハケ目調整とタガの背面は貼り付け後にナデ調整を行う。

2・3は朝顔形埴輪の口縁部である。2は復原口径49.0cmを測り、口縁端部は大きく反り返り、一部歪んでいる。外面は、7本/cmの縦方向のハケ調整で、内面は細かな12本/cmの横方

向のハケ目調整である。3は復原口径53.8cm、口縁部は上外方へ開いた後、端部は水平方向にしておさめる。また、端部は調整によりやや凹む。

4～10は土師器である。4はミニチュア壺で、口径5.2cm・器高5.9cmを測り手捏ねによる。口縁端部は上方につまみ上げておさめる。外面体部には黒斑が残り、口縁部には「×」印がヘラ描きによって施される。5は復原口径8.6cmの杯で、内外面とも指押さえによる痕跡が明瞭に残る。6の椀Cは復原口径10.2cm・器高2.95cmを測る。内面見込み部分には一段の放射状暗文を施す。口縁部は直立気味で、端部は調整により内面に段を有しておさめる。

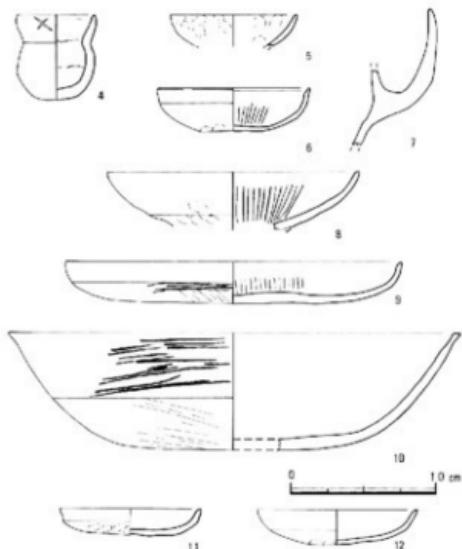


図13 出土遺物土器

7は把手部で、本体の器種は特定できない。大きく反り返った側面三角形を呈するものである。8の高杯は口径17.2cmを測る。内面には放射状暗文を施し、外面は口縁部ではヨコナデで脚部近くは指押さえが残る。9は復原口径23.2cm・器高2.9cmを測る皿Aである。内面見込み部分には放射状暗文を施す。底部外面はヘラ削りを施し、口縁部の立ち上がり付近では横方

向のヘラミガキ、口縁部は横方向のナデ調整を行う。10は鉢で復原口径30.9cm・残存高8.1cmである。外面は上半部はヘラミガキ、下半部はヘラケズリを施し、内面は横方向の強いナデによって成形する。口縁部は上外方に開き、端部は丸くおさめる。

以上は、その調整の特徴から平城宮中期頃のものと思われる。なお1・2は灰橙色を呈するが、以外は赤褐色である。

11・12は土師質小皿である。11は完形品で柱穴6から出土したもので、口径9.5cm・器高1.9cmを測る。やや肉厚で、平底から立ち上がる口縁部を有し、端部はヨコナデによって丸くおさめる。12は口径10.8cmの土師質小皿で、やや丸みのある底部から上外方へ開く口縁部を有する。いずれも、口縁部外面はヨコナデ、底部は未調整であり、13世紀中頃～14世紀前半頃のものと思われる。

### まとめ

今回の調査では、面積に比して遺構が密に検出され、その内容も茶山遺跡に相応しいものであり、近隣での建替えなどの開発に対して十分な対応が必要であることを再認識させられた。

確認された遺構の内容については、円筒埴輪棺や奈良時代の建物を検出することができ、茶山遺跡の性格を色濃く示す資料である。特に、円筒埴輪棺の検出は、今回調査を行った南西約100mの地点で7基の筒埴輪棺がまとまって確認されており、その墓域の広がりを考える上の追加資料となろう。

一方、遺跡内では近年の調査で中世の遺構や遺物が顕著に確認されている。今回の調査でも、遺構として明確なものは土師質小皿を伴った柱穴のみであったが、遺物包含層などから出土する瓦質土器や備前焼の遺物など、当時に生活域であったことを示す資料が得られたことは、過去の成果を補足する上でも大きな成果である。

## 古市大溝跡

この大溝は、昭和39年に秋山日出雄が古市古墳群の航空写真をもとに発見したもので、前の山古墳後円部東側から北西方向にその流路をもつ。以北は、軽里地区の細池から進路を北北西に変えて藤井寺市の上田池・下田池と続き、岡ミサンザイ古墳南東側の堀池へと続き、その後は岡ミサンザイ古墳の前方部に平行するルートをとり高鷲地区の中池に達し、さらに北へは自然の谷を利用して東除川へ流れるとされている。



図14 遺跡内位置図

大溝は、軽里地区では硬い段丘の砂礫層を大きく開削し、幅8～9m・深さ4～5mの規模を有する。この掘削に際しては青山2号墳を壊していることや野々上地区的矢倉古墳を破壊している点などから、大溝の開削時期が6世紀後半以降であるとする考えが主流である。また、大溝の使用目的については、築造時期との関連で異なるが、運河説と灌漑説の二説が考えられている。

このように、遺跡の規模が大きいことに比べ調査面積が少ないため、その構造や築造目的や時期については諸説がある。

### 91-1区

#### 調査の契機と経過

平成3年5月29日付け（羽教社第1-283号）で、羽曳野市軽里3丁目432において、土留擁壁工事に伴い発掘届出書が提出された。当該地は、近年までは「細池」として大溝の姿をとどめていた所の南側に位置する。

西側の隣接地では昭和63年度に同様の工事に伴い発掘調査を実施し、段丘面を大きく掘削した大溝の法面を確認している。また、平成2年度には、南側隣接地の宅地内において個人住宅の建て替えに伴い発掘調査を実施し、段丘礫層上に整地土や遺物包含層を確認している。

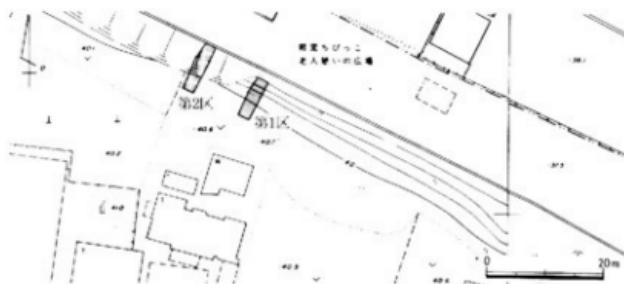
そのため、今回の工事予定箇所においても同様の遺構が検出されることが予測されたため、事前に発掘調査を実施することとなった。

調査は平成3年6月10日から同月17日まで実施した。なお、現地調査にかかる費用は全て申請者の負担による。また、擁壁の基礎工事によって現存する大溝斜面が掘削されるため、設計変更を行い遺跡の保存について協力を求められたこととなった。

## 調査成果

調査区は幅2.0mで設定し、現状法面を可能な深さまで重機掘削し、断面の精査・観察を行い堆積状況を確認することとした。

なお、申請地は雜木や竹林の根で上層の堆積層は大きく乱されている。また、斜面には流土や廃棄物などが多く、上層の大半は近代の産物であ



る。現状の平坦面はおよそ標高40mで、約1.5m～2.0mの深さまで掘削し、比高差6mまで調査を行った。以下、各トレンチの概要を記す。

#### 東側トレンチ（2×8m）

表面から約0.5mは竹藪土や流土で、以下も約1mの厚み（2～13）は近世以降の流土である。現地表面下約1.5mで橙色の段丘疊層の地山面にいたる。この間には、南側では地山面上に粘土層と疊層の水平堆積がみられ、大溝の堤部分である可能性が考えられる（17～19, 21～24）。この上に茶褐色の遺物包含層（14）と考えられる層が堆積しているが、隣接地での包含層と色調が類似するものの、遺物は破片のみであった。これより下では斜面堆積となっており、27層のように地山組成の疊層が崩落した状態で堆積していることから、地山を掘削し堤として盛ったものが大溝側に早い時期に崩落したものと考えられる。

段丘疊層の下では地山の状況が変化し、51より下層では淡青灰色粘土～シルト質土となる。現状での地山の斜面は約32°の傾斜を有している。

#### 西側トレンチ（2×6.5m）

現状では既に竹藪土の上に造成土が盛られている。現地表面下1.5m～2.0mで段丘疊層となる。ここでは、下層は土砂が水平堆積しているが、その組成から東トレンチで確認できた堤部分の層と似ており、自然に流れたものではなく人為的に埋め戻された状態とみることができる（13・16～18・20）。ただし、遺物などが出土しないため、その行為の時期については断定できない。この上位では大半が斜面堆積で、自然的な崩落状態とみることができる。

ここでも段丘疊層の下層は変化し、（27）より下層では橙灰色の粘質土となる。なお、地山面の傾斜はやや急で約41°を測る。

#### まとめ

いずれの調査区においても、大溝の南側法面を確認することができた。この面は羽曳野丘陵から派生している段丘疊層で、さらに北へのび藤井寺市域の青山地区へ続くものであるが、ここで大きく開削して古市大溝のルートとした状況が確認できた。また東トレンチでは一部ではあるが、粘土層と疊層の互層部分を確認することができた。これは明らかに堤部分と判断できる。

層序の大半が流土となっており、出土遺物が希薄なため、大溝自体の掘削時期を示す資料を得ることができなかった。

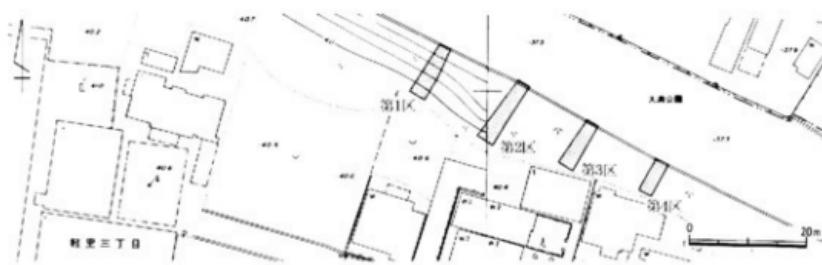


図17 調査区位置図

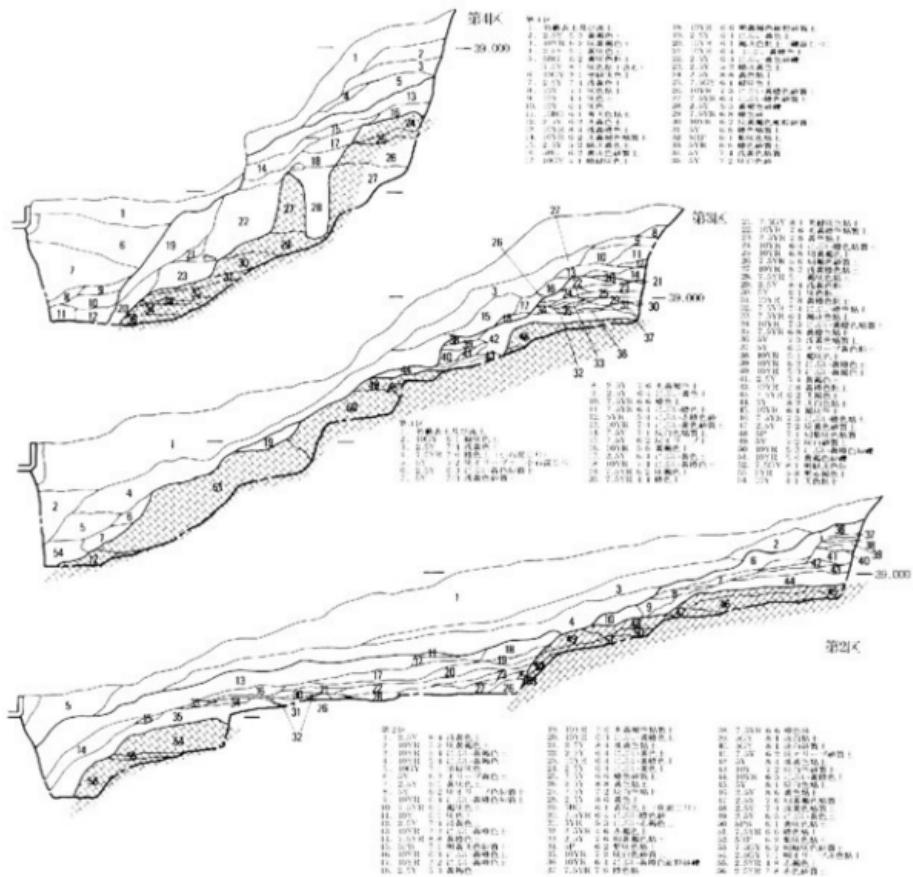


図18 トレンチ断面図

## 第2区

### 調査の契機と経過

平成3年7月12日付け（羽教社第1-530号）で、羽曳野市轄里3丁目424番地において、土留擁壁工事に伴い発掘届出書が提出された。当該地は、近年までは「細池」として大溝の姿をとどめていた所で、同様の場所で昭和63年度及び今年度に調査を実施している。

調査は平成3年8月1日から同月12日まで実施した。

現地における費用の一部は申請者の負担による。また、擁壁の基礎工事は全て流土若しくは造成盛土内におさまり大溝の法面等は盛土によって保護されることから、トレンチ調査のみで面的な調査は行わなかった。

調査は、4ヶ所の調査区を設定し、重機掘削によって遺物包含層が確認されるところまでの廃土や流土などを除去し、以下は人力掘削を行い、断面及び平面を精査した。なお、第1トレンチでは隣接地での発掘調査で確認された古墳の延長部が現れたため、調査を羽曳野市遺跡調査会に委ねた。

### 遺構

第1トレンチー表土及び造成土を除去した段階で、黄灰色土の堆積土があり、ここにまとまって埴輪や須恵器が出士した。また、断面では円筒埴輪が樹立した状態が確認されたため、調査区拡張について申請者と協議していた。その際に、隣接地での発掘調査によって古墳副葬品（馬具）や埴輪が集中して出土しており、当該地につながる埋没古墳の存在が推察された。そのため、以後当地の調査については遺跡調査会で継続することになった。

第2トレンチー調査区中央では現地表面下約1mの流土などを除去した下層で、黄灰色粘質土をベースとする平坦面があり、ここに炭を多量に含む遺構（■部）と土坑の周囲が赤褐色に変色する遺構（■）

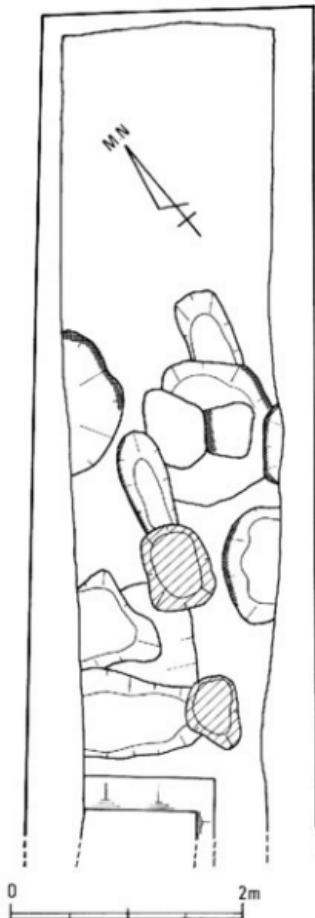


図19 第2区平面図

部)が13ヶ所まとめて検出された。土壙1は0.7m×0.5mの長方形を呈する。また、土壙2は方形で一角が突出する平面形を呈する。いずれも炭で遺構を埋めた状態である。これらの炭の中には脆くなつて粉末化した白色の骨片が認められた(図版四)。また、釘の一部とみられる鉄製品の破片も出土した。一方、土坑には黄灰色粘質土が入るが、遺構の周縁である地山部分は固く赤褐色に焼けている。いずれも深さは浅く、検出面から約0.15m程度である。

これらの遺構は、骨などが認められることから火葬墓と考えられる。当地で火葬し、炭と骨を集め再葬したものである。副葬品などの遺物はほとんど出土しないが、焼土坑の埋土からは上質小皿片が認められることから、14~15世紀ころのものと思われる。このように当トレチ子での地山面が他に比べて緩やかとなっており、火葬を行った際に大きく削平されている。

調査区南端で表土の下直ぐのところで砂質土と粘質土の層が薄く交互に堆積している状況が確認された(36~43)。灰色粘土と黄色粘土、灰色土などを互層に積んでおりこれらは、薄く丁寧に積み上げられていた。この互層部分が、大溝の南側堤の盛土であるとも考えられたが、大溝法面からやや距離があることやその土質や層厚が薄く丁寧なことから、堤ではなく第1トレチ子で確認されたような埋没古墳の埴丘盛土である可能性が考えられる。

第3トレチ子—ここでも調査区の南端では、橙色粘土層の下に築堤をしたと思われる互層状のものが確認される。

第4トレチ子—現状では表面が急斜面となっており、耕作土や竹藪の崩落が著しい。また、溜め池として機能していた際の浸食も多かったものと思われ、近年の埋め戻し土が斜面側にまで大きく入り込んでいる。

### まとめ

今回の調査では、古市大溝の掘削状況や築堤部の残存状況を確認することを主眼としていたが、大溝を開削するに際して、築造後あまり時間を経ていない既設の古墳を破壊していることが確認された。これは、北側の青山2号墳及び野々上地区の矢倉古墳と同様で、古墳築造の時期を限定するうえでは重要な発見である。(この点については、遺跡調査会の報告を待つ)

また、段丘上の平坦部では地山面の上に、丁寧な互層の堆積を確認したが、前述のとおり今まで確認されていた築堤の互層よりは各単位の盛土が薄く、掘削した段丘地山の礫などを用いていない点で、古墳盛土の可能性がある。

さらに、中世には大溝の法面に平坦部を設け、火葬を行っていたことは新たな発見である。羽曳野市内では羽曳野丘陵上で奈良時代を中心とした火葬墓が確認されているが、今回のように平野部の遺跡でまとめて確認された点で新たな発見であり、今後は当該地蔵域がどこの集落に属するものであるかなどの検討も必要であろう。

## 東阪田遺跡

遺跡は、市域の中央を流れる石川左岸の中流域の段丘面に位置する。現在、南北約700m・東西約500mの範囲が遺跡として周知され、東縁部では一部低位段丘となっている。遺跡の南側には、富田林市域より広がり弥生時代中期の竪穴住居などを多数検出した喜志遺跡に隣接し、北側及び西側には、西浦・尺度地区散布地が広がっている。

この遺跡は、昭和50年代前半までの大阪府教育委員会の調査成果から縄文～弥生時代の遺跡として考えられていた。その後、本市教育委員会の発掘により、奈良時代の掘立柱建物群や中世の地鎮的要素の強い土器埋めなどを確認して

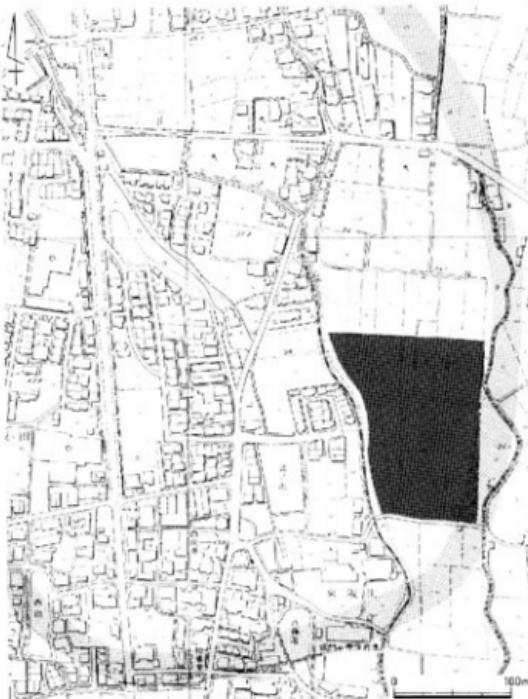


図20 遺跡内位置図

おり、奈良時代～中世における遺構や遺物が新たに確認されたことから、旧石器～中世に至る複合遺跡として周知されるようになった。

今回の調査区は、遺構が顕著に確認され遺跡の中心となる中位段丘から、西浦水路（唐臼井路）とよばれる川を挟み3mの比高差で急激に低くなった低位段丘面の所である。

なお、この唐臼井路は古市古墳群中を流れる古市大溝の水源である石川からの流路と推定されているもので、これに接する当該地での調査で、用途や時代について不明な古市大溝について何らかの資料が得られることも期待された。

### 調査の契機と経過

新設小学校の校舎及び体育館及びプールの建設に伴い、調査依頼書が平成3年6月14日付け

(羽教文第1-396号)で提出された。申請のあった地域は、水田地帯で周辺での調査例がなく遺構の残存状況が不確実であるため、事前の確認調査が必要と判断された。そのため、事業課と早い段階から協議を行い、地権者の同意を得られた段階で調査を実施した。

なお、西側の丘陵地に高さを合わせるため東側では多くの盛土を施す予定である。また、敷地は16,198m<sup>2</sup>であるが運動場など構造物がない範囲が多いことから、建設工事予定のある校舎(1~10)・体育館(11~17)とプール部分(20~25)において調査を実施することになった。調査は重機掘削の後、断面及び平面を人力で精査し、遺構や遺物包含層の検出に努めた。

調査は平成3年10月2日~同月4日まで現地調査を実施し、全部で25箇所のトレント(縦約1m・総延長130m)で実施した。なお、調査における費用については事業課の負担によった。

## 調査成果

基本的な層序としては、耕作土・黄灰色土・灰黄色土・黄灰緑色粘質土・灰白色砂層の順にほぼ水平堆積する。特に、黄灰緑色粘質土は約0.6mの厚みではば全面に堆積し、この下層で



図21 調査区位置図

は砂層が広がる。これらの各堆積層は土質の占まりが悪く湧水が激しいため、調査中も直ぐに掘削深度の半分まで満水になる状況で、壁面の崩落も頻繁におこった。

このような状況のなか、現地表面下2mまで掘削したが、安定した地山面を確認することができなかった。また、出土する遺物は上層の黄灰色土及び灰黄色土からの細片のみで、これらの層については色調や組成から遺物包含層とは考えられず、また精査を行っても遺構も認められなかった。

### まとめ

以上のように、地山面は確認することができなかったが、安定した層位や遺構として面的な広がりのあるところがなく、遺物包含層及び遺構は確認されなかった。

これの層序は西側の水位の高い西浦水路の氾濫により一帯が洪水になったり湛水状態であったりした痕跡であると考えられ、当該地は生活域ではなかったものと判断される。

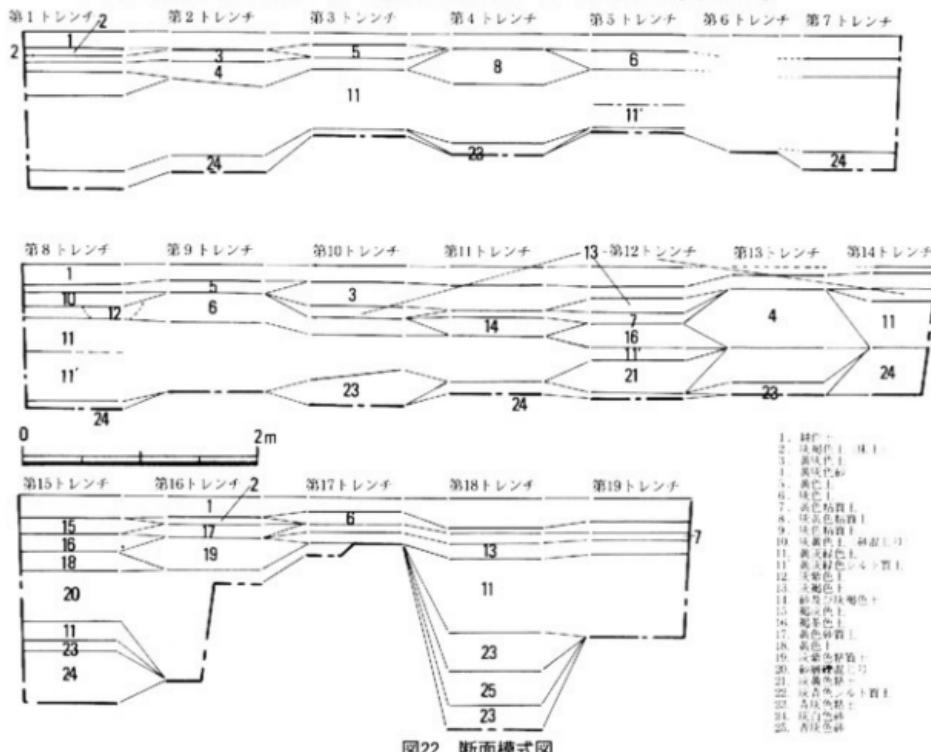


図22 断面模式図

## 高屋築山古墳・高屋城跡

今回報告の両調査区は高屋城跡に該当し、特に1区については高屋築山古墳の外堤南東側に位置している。

高屋城跡—この丘陵を利用して築かれた中世平山城で、南北800m、東西450mの日本でも屈指の規模をもつ。その構造は、丘陵全体を土塁と堀で仕切りⅠ郭・Ⅱ郭・Ⅲ郭として南北に配置し、特にⅠ郭は高屋築山古墳を利用している。発掘調査の成果などから城郭は、応仁の乱後に築城され、畠山氏の居城であったが、しばしば城主の交代があり、最終的には織田信長によって天正3（1575）年に焼き討ちされた。

高屋築山古墳—古墳は丘陵の北端に築かれた前方後円墳で、古市古墳群内でも前方部が西面する南側のグループである。規模は、墳丘長122m・後円部直径78m・高さ13m、前方部幅100m・高さ12.5mを測り、前方部が開き僅かに後円部が高い。周濠は幅約15mで全周するが、外堤については地形の変形が著しくその変換点は不明瞭である。また、①前方部の北隅が直角になること、②以前墳丘に大きな空洞があり横穴式石室が採用されていると考えられる。また、出土する埴輪の特徴から川西編年の第V期に属することなどが挙



図23 遺跡内位置図



図24 調査区位置図

げられる。さらに、古墳からは、正倉院と同種の玉碗が出土したと伝えられている。このような遺物などによる年代観から、古墳の築造は6世紀前半と考えられる。

## 第1区

### 調査の契機と経過

羽曳野市古市5丁目860番地2号他1筆において「土木工事等における埋蔵文化財包蔵地の発掘届書」が平成3年12月12日付けで福田建設株式会社より提出された（羽教社1-1296号）。当該地の南西では本市教育委員会によって調査が行われており、礎石群、集石遺構、溝などの遺構や上師皿、陶磁器、備前焼、湊焼など遺物が出土しており大きな成果をあげている。このため申請者と発掘調査に関する覚書を交換し、平成4年3月16日～同年3月31日まで本調査を実施した。

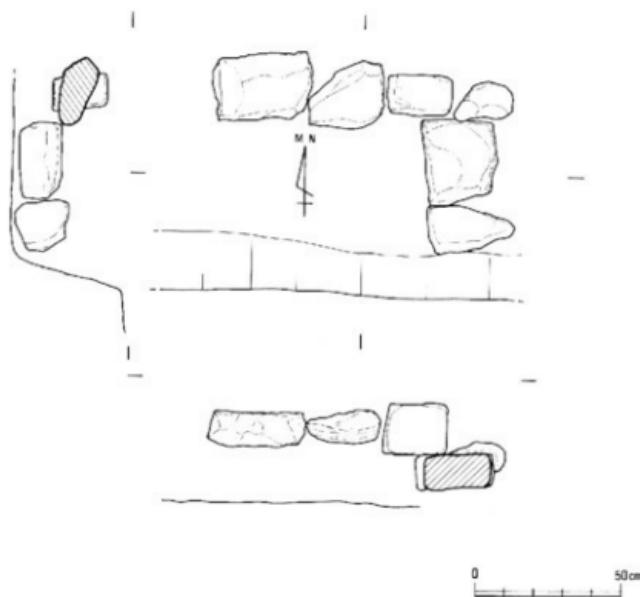


図25 石組遺構平面及び立面図

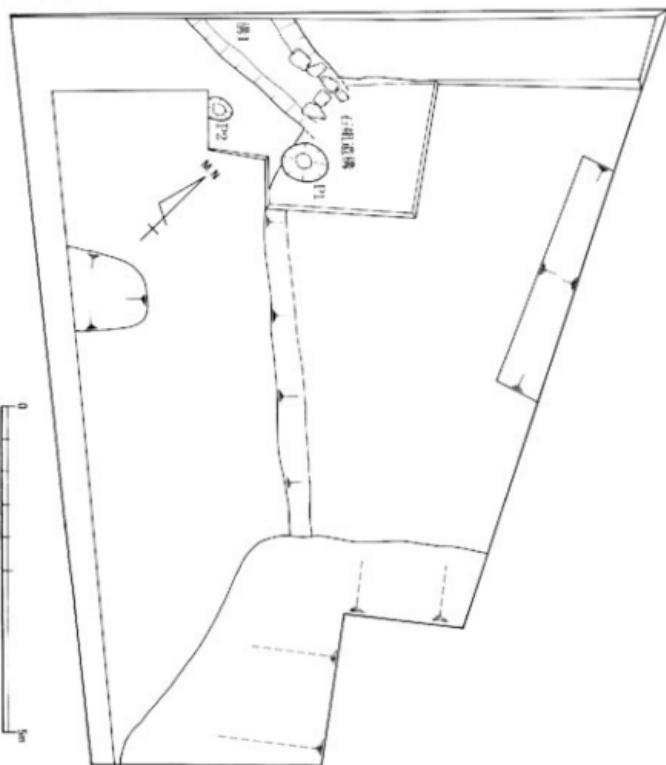
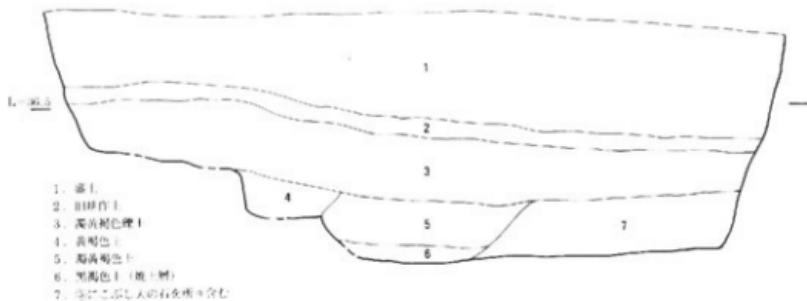


図26 平面図及び断面図

## 基本層序

調査区は、安閑陵古墳外堤の南東部分に接しており、若干の高低差が存在する。このためか厚い所では1m以上の盛土が堆積している。その下層は、旧耕土を挟んで褐色系の粘質土が堆積し、調査区の南側では地山層へと続くが、北側では疊を含まない層と含む層に分かれる。また疊を含まない層の下から、焼土層が一部確認できた。

## 遺構

今回の調査区では、羽曳野給食の跡地のためか攪乱を受けている場所が多い。調査区の西側で、石組遺構、溝とピットの一部を検出した。

### 石組遺構

溝1の底面で検出した。北側に大小4個の石を東西に配列し、これに直角に2個の石を並べている。使用されている石は、安山岩や凝灰岩で、一部の石に焼けたような痕跡が見える。石組を検出した時には、西側及び南側には配石は見られず、後世に削平された可能性が考えられる。この石組遺構が、墓あるいは別の性格をもっているかは現状では判断できなかった。また遺物の出土も無く、時期についても不明である。

### 溝1

この溝は検出面で幅約2~3m、深さ約30cmを測る。溝内からは遺物出土せず、時期などは不明である。

## 遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師皿片、瓦質土器の破片など数点のみであった。このため図化できる遺物は無かった。

## まとめ

今回の調査地は、安閑陵古墳（本丸）への通路部分に近接しており、また高屋城第1郭に当たる。第1郭は、城を攻め込まれた際の要害であり非常用的な要素が強い。また日常の生活はII郭、III郭で行われていた。過去の調査でも第1郭は、西南部分で庭園状遺構や茶室と考えられる特殊な遺構が検出されているが、遺構の密集性は低い。このため今回の調査は、I郭の性格を反映してか遺構、遺物はあまり検出されなかつたものと思われる。

## 第2区

### 調査の契機と経過

平成3年6月8日付け（羽教社第1-349号）において、下水道事業として古市5丁目及び6丁目における本管布設工事に伴う発掘届出書が提出された。

当初は既設道路であるため、埋管によって多くの部分で搅乱を受け遺構の残存状況が悪いと判断されたため、立会調査としていた。しかし、周辺での水道管やガス管の移設工事での立会調査で焼土層や整地土などが良好に残存している状況が確認された。また、掘削予定地の道路に面する宅地部分の発掘調査では、高屋城に伴う多くの遺構や焼土、遺物包含層などが確認されている。

これらの状況から担当課と協議を重ね、申請地において可能な部分については事前に発掘調査を実施することとなった。今回は、特に昭和55年度に府教委の発掘調査によって高屋城期の礎石建物や園池状遺構などと八幡山古墳の周濠が確認された調査区の西側道路部分について調査を実施した。なお、調査は平成3年10月8日～10月13日まで実施し、現地調査にかかる費用の全ては公共事業調査費で負担した。



図27 調査区位置図

### 層序と遺構

調査は、人孔部分（1.8m×1.8m）とこれにつながる埋管部分（1m×2.5m）について、地山面が確認できた現地表面下約1.3mまで掘削した。路盤及び造成土を重機で除去し、包含層及び整地土を人力掘削した。

基本的な層序としては、現地表面下約0.5mで黄色系土の第1整地層が堆積し若干の遺物が含まれる。その下には第1焼土層が（第2トレンチで約0.2m層厚）堆積する。この焼土層を除くとさらに第2整地層（第2トレンチで約0.3m層厚）と第3焼土層があり、この下層が黄橙色系シルト質土の地山面にいたる。この第2整地層は疊や埴輪片がみられることから、隣接する八幡山古墳の墳丘を削り造成したものと考えられる。

このように、地山面と第2整地面での遺構面が確認された。第1トレンチでは第2整地面上

で多量の炭化物と土師質小皿が入る遺構を確認した。平面は不定形でさらに調査区外へ広がる。地山面で検出した遺構は第1トレンチでは柱穴5ヶ所と礎と焼土が入る土坑1ヶ所である。また、第2トレンチでは柱穴1ヶ所と溝が1条である。この柱穴は直径0.3m・深さ0.4mで底に根石とした石が残る。溝は幅約0.4m・深さ0.05m程度である。

### 遺物

遺物は、各焼土層や整地土内から出土し、土師質小皿・土師質土器（羽釜など）・輸入陶磁器・備前焼・埴・埴輪などが主な出土遺物である。

1～7は、土師質皿である。1～6は小皿で口径7.4cm～12.8cmを測る。いずれも、内面と外面の口縁部はヨコナデを施す他は未調整のままである。7は中皿で復原口径14.2cmを測る。丸みのある底部から外方へ開く口縁部を有し端部はやや反りぎみである。特に1・8はヘソ皿とよばれるタイプのもので、凹んだ底部から上外方へ開く口縁部を有し、端部はやや立ち上げておさめ

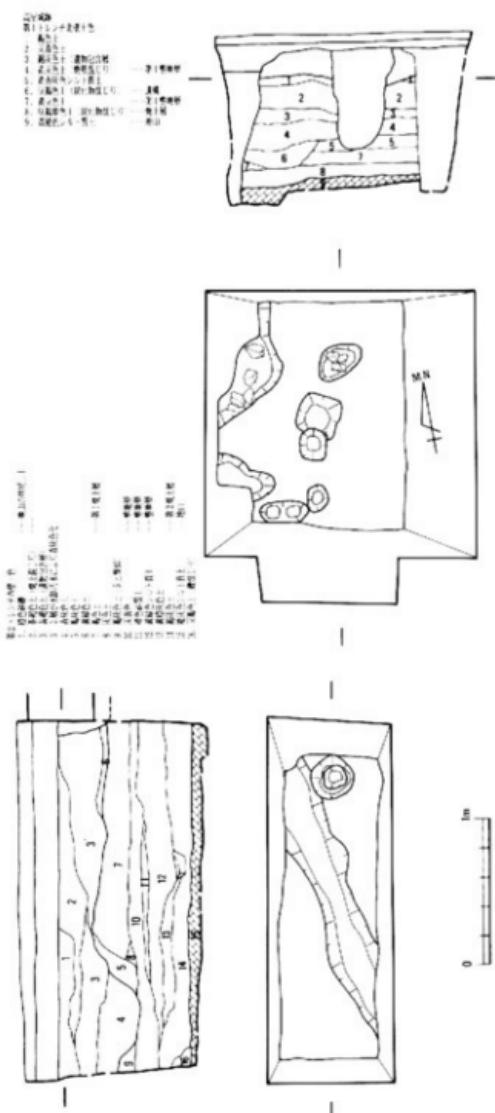


図28 平面及び断面図

る。煤の付着があり灯明皿であろう。

8は青磁碗の高台部で、高台内面は釉の様取りをする。9は備前焼の摺鉢で、復原口径27.4cmを測る。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり外面にはわずかな段が2段付く。内面には強いナデ調整が施されている。

10・11は円筒埴輪で、色調が同じことから同一固体のものと思われる。タガは低い台形状のもので、外面は磨耗のため調整は不明確であるが、一次調整のタテハケが認められる。また、円形の透かしを有する。

#### まとめ

今回の調査では僅かな面積であったが、断面や平面において2面の焼土層と整地層を確認することができた。これは、高屋城で起きた焼き討などの火災によるもので、その度に復興のための整地を行っている状況が窺える。出土遺物が少ないため各焼土が文献などにあらわれるどの年のものかは判断できないが、今後の検討の中で焼土層の広がりを知る上でも欠かせない資料と思われる。

今後、都市基盤整備をすすめる上で推進されている下水道事業であるが、今回のように道路部分において実施したトレンチ調査において、多くの調査成果が得られたことの意義は大きい。当高屋城第二郭内や八幡山古墳隣接などにおいても次年度以降も工事が予定されているため、事前に調査を実施することで多くの成果を得られることが期待される。

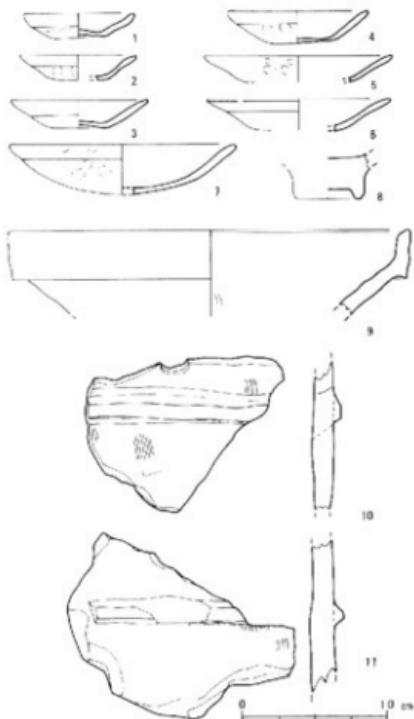


図29 出土遺物

## 野々上遺跡・野中ボケ山古墳

野々上遺跡は、羽曳野市の中央やや西の中位段丘に立地する。本格的な発掘調査は1977（昭和52）年大阪府教育委員会によって始められ、奈良・平安時代を中心とした掘立柱建物や埋没古墳等が確認されている。

野中ボケ山古墳は、羽曳野丘陵から派生した中位段丘の南側に立地した前方後円墳で、その規模は墳丘長122m、前方部幅107m、高さ13m、後円部径65m、高さ11.5mを測る。前方部が、幅・高さとともに後円部を凌駕する古市古墳群の中でも後期に造られた古墳である。

墳丘内部は、宮内庁に管理されているため実態は不明であるが、くびれ部南東側に造出をもち、周濠西コーナーが「片直角」の周濠形態を有する。

1978・79（昭和53・54）年大阪府教育委員会の調査によって、古墳外堤上に4基の円筒埴輪列を確認している。円筒埴輪は、窯窯焼成のタテハケをもつものであった。

1981（昭和56）年には、本市教育委員会によって、埴輪窯の調査が行われた。野中ボケ山古墳前方部外堤北西部の中位段丘南斜面に構築された窯窓で、野中ボケ山古墳に対する埴輪の供給を行っていた窯であると



図30 遺跡位置図

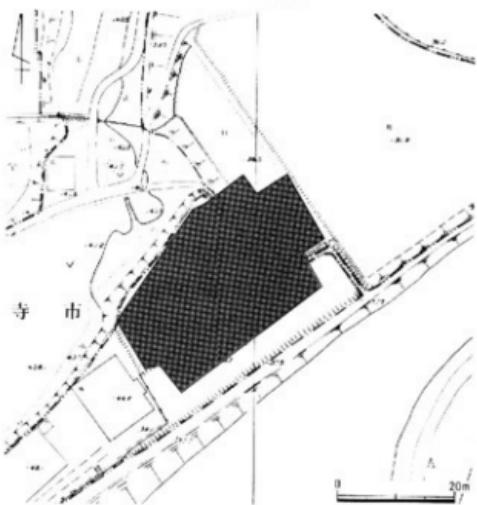


図31 調査区位置図

考えられている。

### 調査の契機と経過

羽曳野市野々上3丁目502番地他において「土木工事等における埋蔵文化財包蔵地発掘届書」が平成3年11月19日付けで大発産業株式会社より提出された（羽教社第1-1198号）。当該地は、野中ボケ山（仁賢陵）古墳周濠の北西に隣接し、周辺の調査から埴輪列、埴輪窓などが確認されている。このため古墳に関連する遺構の存在が多分に予想されることから、平成3年11月26、27日に事前の確認調査を行った。調査にあたっての目的は、遺構、遺物の有無の確認を目的とし、古墳の周濠に直交するようにトレンチを設定した。その結果、耕作土の約40cm下より周濠に平行した溝と溝内から埴輪などの遺物が確認された。このため申請者と協議を行った結果、羽曳野市教育委員会と地主との間で覚書を締結し、工事によって遺構、遺物が壊れる部分において発掘調査を行うことにした。現地調査は、平成3年12月9日～平成4年2月3日まで実施した。

### 基本層序と遺構

基本層序は、耕作土、明黄褐色土、灰黃褐色砂礫土、黃褐色粘質土、明黃褐色粘土、明褐色土、明褐色砂礫土（地山）となる。またトレンチの東側は地形的に一段低くなっている。その部分は池の埋立土により、土層は一部攪乱を受けていた。

今回の調査地は、仁賢陵古墳北西側に位置する。地形的には周濠付近で段丘のレベルが急に落ちている。この落ちから周濠肩までの部分は、過去の大坂府教育委員会による発掘調査から堤（周庭帯）として周知された場所にあたる。

検出した溝は、現在の周濠外側の肩から約16m離れた場所で検出された。溝の幅は検出したレベルで約2.2m～約9m、深さ50～60cmを測る。溝の幅は西側が狭く、東側に進むに連れハの字状に拡がっている。また、トレンチの東側は後世の改変（下田池の築造）によって削平さ

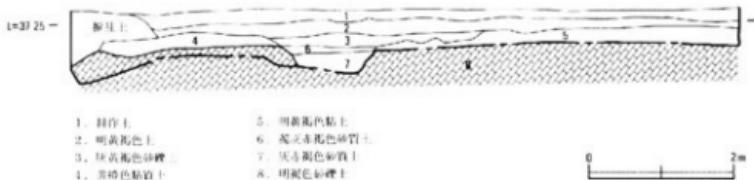


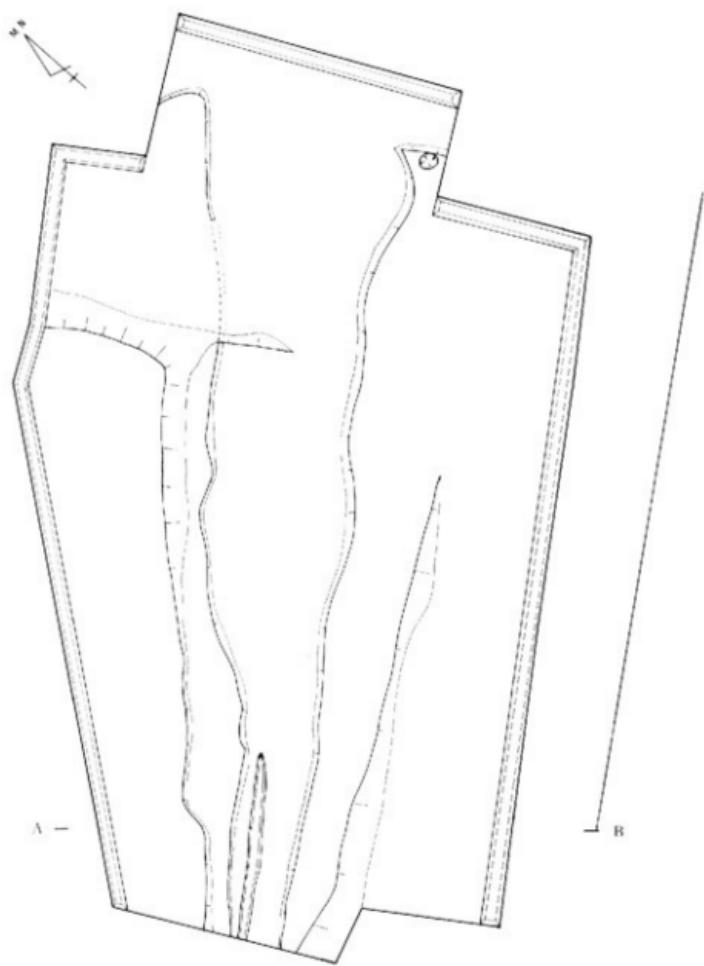
図32 土層断面図

れており遺構、遺物ともに確認されなかった。埴輪は溝内埋土である灰黄褐色砂礫土層から出土し、特にトレンチ西側部分において集中して見られた。この溝から出土した埴輪はおそらく、昭和54（1979）年大阪府教育委員会が、仁賢陵古墳前方部外堤の調査において埴輪列を確認していることから、堤上に立て並べられたものであると考えられる。

また、今回検出した溝の西側延長線上には、野々上埴輪窯に当たることから、この溝が完周する可能性は低い。



図33 トレンチおよび埴輪窯位置図



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10m

图34 平面图



圖35 出土遺物（1）

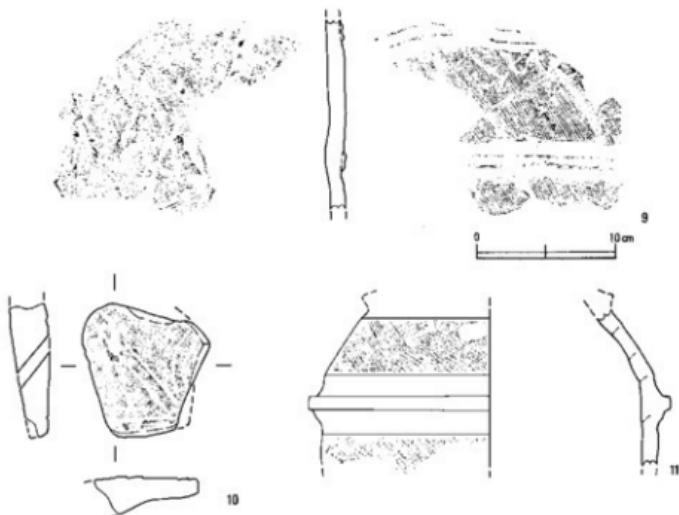


図36 出土遺物（2）

### 遺 物

遺物の大半は埴輪、須恵器などで、溝内埋土である灰黄褐色砂礫土および灰赤褐色砂質土層から中心に出土した。

1は須恵器甕である。体部は倒卵形を呈し外面を叩き、内面には同心円文が残る。2～9は円筒埴輪である。野々上埴輪窯跡群から出土しているもの同様、外面一次調整タテ・ナナメハケ、内面をナデ調整をした川西宏幸氏の「円筒埴輪総論」によるV期の埴輪である。図化したものはいずれも土師質で、復原できたもので口縁部径40cm前後の中型に属するものである。埴輪のタガは三角もしくは台形で、色調は赤褐色や黄褐色に大別できる。10は、石見型と呼ばれる盾である。野々上埴輪窯跡からも石見型盾が出土しているが、これとは文様構成がやや異なる。11は朝顔形埴輪である。頭部から下のもので、体部径は復元で25.7cmを測る。軟質で淡黄白色を呈する。

### まとめ

今回の調査は、白鳥陵古墳、允恭陵古墳、はざみ山古墳などで確認されている「外堤を画する溝」を検出した。この溝は、古墳の立地や西側に存在する埴輪窯などから完周する可能性は低い。おそらく、墓域など区画の意図とした性格が強い溝であると考えられる。

## 郡戸地区における確認調査

### 調査の契機と経過

郡戸600-2, 600-18の各一部、604-1, 604-4, 605, 606, 617-7, 617-9において、宅地造成工事計画がなされた。同場所は、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが、上木工事の敷地面積が476.12m<sup>2</sup>と広範囲にわたるものであったため、試掘依頼書が平成2年7月12日付で提出された。これを受け、平成3年8月5日に試掘調査を実施し、その結果、表土以下に少量の遺物が認められる遺物包含層を検出し、土層断面の観察によって地山層が落ち込む様相がみられた。この成果をもって申請者側と協議して、道路予定部分のうち、地山層の落ち込みや遺物包含層が検出された箇所を中心に確認調査を実施することで合意を得た。確認調査の期間は、平成3年8月22日から同年8月24日までである。調査面積は約16m<sup>2</sup>である。その結果、不明瞭ながらではあるが遺構と思われる地山層の落ち込みを数箇所において検出した。また、中世の時期を中心とする遺物も若干量出土した。なお、調査に係る費用は、申請者が負担した。

当該地の付近には、周知の遺跡として、郡戸遺跡、郡戸東遺跡や河原



図37 調査位置図



図38 調査区位置図

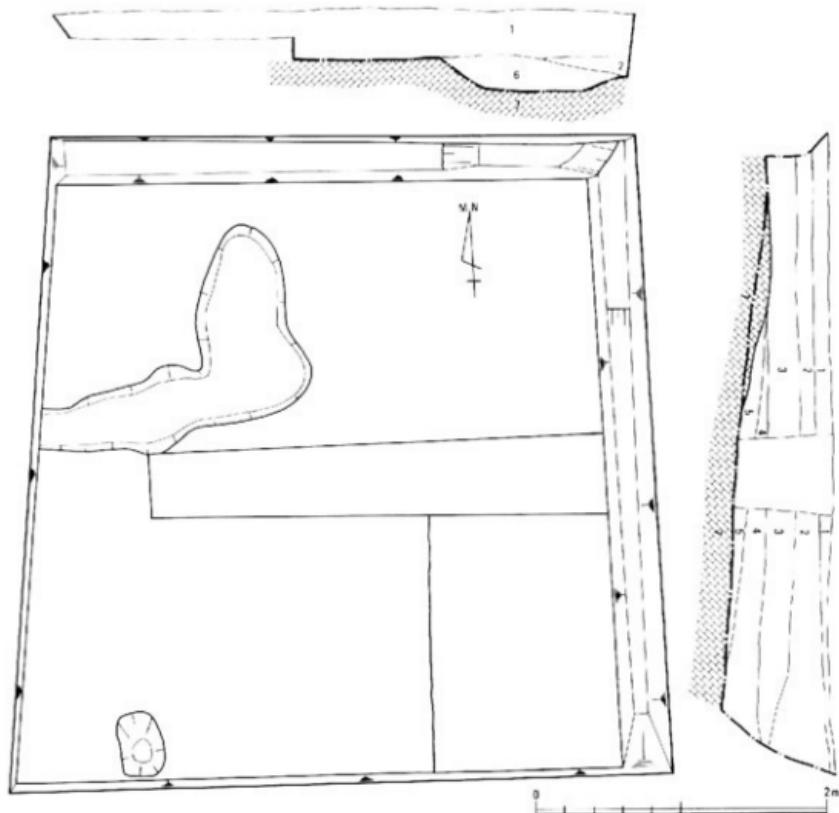


図39 平面図・断面図

城遺跡などが占地している。これらの遺跡は、東除川の河岸段丘面に立地しており、縄紋時代から近世にいたるまでの遺物や遺構が確認されている。中でも、中世の時期に所属する遺構や遺物が顕著に検出されている。しかし、近隣周辺は旧街地や農耕地が広がっており、開発工事の件数も比較的少なかった。そのため、これらの遺跡においても調査件数はさほど多くなく、遺跡の内容も不明瞭であった。

## 調査成果

基本的な層序は以下の通りである。表土下には、淡黄灰褐色砂質土層、茶灰褐色砂質土層、灰茶色砂質土層、茶褐色砂質土層などといった遺物包含層が観察され、その下に地山層である黄棕褐色砂礫土層を確認した。地山層は、部分的にその色調が灰白色になるところもあった。

地山層が落ち込む、あるいはくぼむ箇所がみられ、そこに遺物を包含する土層がみられた。ここからは、中世土器の破片が少量ながら出土している。ただ、地山層の落ち込み等は、不定形なものなので、積極的に人為的に掘り込まれたものなのかどうか、断定できなかった。

遺物は包含層や落ち込みなどから出土しているが、小破片のものが多い。瓦器、羽釜、土師質土器、須恵質土器や陶磁器などがみられる。瓦器は、その特徴から12～13世紀に属するものと考えられる。

## 恵我之荘遺跡

恵我之荘遺跡は、羽曳野丘陵から北へ派生した中位段丘上に存在し、東除川の西に位置している。周辺には、北に近接して長尾街道が東西に走り、これを挟んで北東に島泉北遺跡が存在する。また東除川を挟んで東には明教寺跡、西には大型前方後円墳の大塚山古墳がそびえる。本遺跡は、昭和63年に共同住宅の建設に伴って新規発見された遺跡で、この時の調査では古墳時代の建物や溝、土壌、中世の建物や土壌などが検出された。また、少なからず埴輪の出土も見られることから、付近には古墳は存在していないものの、「番上塚」や「三角」など古墳を思わせる小字名が残っていることから、かつては古墳が存在していた可能性が考えられる。現在のところ、東除川より西側では大塚山古墳を除いて墳丘を残す古墳の存在は知られていない。ただおよそ2km南に位置する丹上遺跡で過去に削平された古墳が1基発見され、隣接する松原市でも同様に削平された古墳が発見されており、今後このような削平された古墳がこの地域でも明確になってくると思われる。

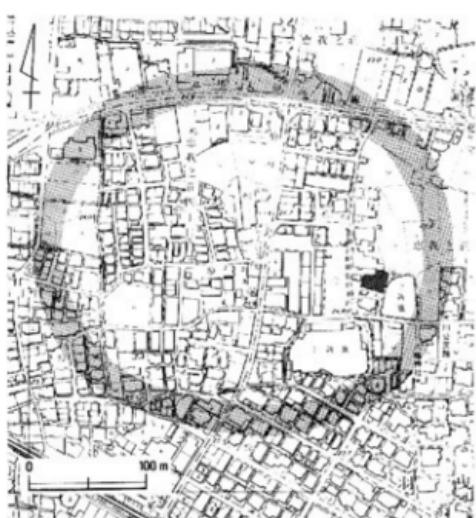


図40 遺跡内位置図



図41 調査区配置図

## 調査の契機と経過

調査地は恵我之荘2丁目4-3に所在し、遺跡内の東縁部にあたり、昭和63年度に古墳時代と中世の建物群が確認された調査地の近くに位置する。

当該地において、共同住宅建設に伴い「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地における発掘届出書」が平成3年5月22日付け（羽教社第1-242号）で提出され、これに基づいて同年8月1日に事前調査を実施した。調査は建物建設予定地内に調査区を3カ所設定し、重機掘削の後に人力で断面及び平面を精査した。

その結果、耕作土の下に0.25~0.3mの厚みで茶褐色土の遺物包含層が水平に堆積し、須恵器、土師器や埴輪が出土した。また、下層は黄色粘土の地山となり、この地山を掘り込む柱状の遺構等が確認された。そのため、現状保存の協議を行ったが、設計変更等で遺構の保存措置が困難なため、工事に際し遺構等が破壊される部分において発掘調査を実施することとなった。調査は、平成3年8月19日～同年9月9日まで現地調査を実施し、調査面積はおよそ350m<sup>2</sup>を測る。なお、現地における調査費用は全て申請者の負担による。

## 基本層序

調査区の西側では旧耕土直下黄灰色粘質土の地山層になるが、東側では淡黄色砂質土や黒褐色粘質土の遺物包含層が30cm程堆積し、さらに南側では黄褐色粘質土が堆積し、東側より遺物包含層は厚くなる。このため旧地形は、西から東南へとなだらかに傾斜しているものと考えられる。堆積層は全体的に粘質系であるが、かなり砂質土を含む場所も存在する。検出された遺構は、すべて地山面で検出されている。

## 遺構

建物1 南北2間×東西2間の総柱の掘立柱建物である。南北の柱間は約1.8m、東西の柱間は、南北よりやや短く約1.6~1.7mを測る。柱穴の掘方は約60cm~80cmあり、深さは約40cm程ある。また柱穴の切り合ひが各所で確認できるため、少なくとも1回以上は建て替えが行われていると考えられる。時期は、出土遺物から奈良時代頃と思われる。

溝1 東西方向に走り、長さ14m以上、幅80cm~1m、深さ約15cmを測る。溝自体は、調査区の北西で途切れている。この溝1からの遺物の出土は少なく、細片となっているものが多く正確な時期は判断できない。しかし溝1は、溝2及び溝3を切って作られているためこれらの溝の時期よりは新しいと考えられる。

溝2 建物1の東辺に平行して走り、途中から西に方向を変え、ほぼL字状に屈曲する。建物に伴うL字溝的な要素も考えられるが、南辺は建物に平行せず、若干ずれが生じている。く



図42 平面図

わえて溝からの遺物の出土も少なく、建物との時期も不明瞭であり、建物に伴わないものと考える。

溝3 中心から三方向に伸びる。溝幅は狭く、長さも短い。また遺構からの遺物の出土は無く時期は不明である。

溝4 調査区南辺で東西方向に走り、調査区外まで伸びる。遺物の出土は少なく時期は不明である。

落ち込み 黒褐色系の砂質土が堆積する。遺物の出土も多く、5世紀後半ごろに限定できる。また包含層からもこの時期の遺物が多く出土しているため、一時期に埋没したものと考えられる。

## 遺 物

1～6、13～16は須恵器杯蓋である。1～6は口径がおよそ12～14cmにおさまり、器高も4.5cm前後になる。調整は外面については、天井部がほぼ全面に回転ヘラケズリが施され、体部は回転ナデが見られる。また内面については、ほぼ全体的に回転ナデが見られるが、一部天井中心部裏面に不整方向のナデが看取できる。一方その形態については、体部が器高の1/2～2/3を占め、天井部は平坦面をもちらながらやや緩やかな傾斜をもつ。稜線は鋭く突出しているものが多く、比較的シャープな感がある。ただ1については、鈍く丸みをもっている。体部は1がやや内湾してハの字状に外反する他は、ほぼ直線になる。またその端部は、9が面をもつ以外は、凹んで段を有する。これらの特徴からTK216～208型式におさまる。その時期は5世紀後半頃と考えられる。13～15の杯蓋は、口径がおよそ14～15cm、器高は5cmほどにおさまる。調整は外面が、回転ヘラケズリ及び回転ナデが施されるが、回転ヘラケズリは全体のほぼ半分ぐらに留まっている。内面は回転ナデが施される。形態は天井部につまみがつき、稜線は退化して、13・14は下部に沈線を巡らすことで稜線を作っているが、15は明瞭な稜線は見られなくなる。これらの特徴からTK10～MT85型式におさまる。時期は6世紀前半～中頃と考えられる。16は天井部に宝珠つまみがつき、内面にはかえりが伴う。かえりは、口縁部よりも突出せず内側におさまる。外面調整は、中心部から約半分が回転ヘラケズリ、口縁部まで回転ナデが施される。一方内面は回転ナデのみである。これらの特徴からTK217型式（飛鳥III）、時期は7世紀中～後半と考えられる。7～12は須恵器杯身である。口径は10.5～14cm程度、器高は4cm前後を測る。調整については、7・8が外面の底部全体に回転ヘラケズリが施され、内面は回転ナデが行われている。9～12は外面底部に回転ヘラケズリが施されるが、その範囲は狭くなり、やや粗さが感じられる。形態については、7・8が、立ち上がりと体部がほぼ同じ長さであるのに対して9～12は立ち上がりが短く、体部が長い傾向にある。また立ち上がりは前

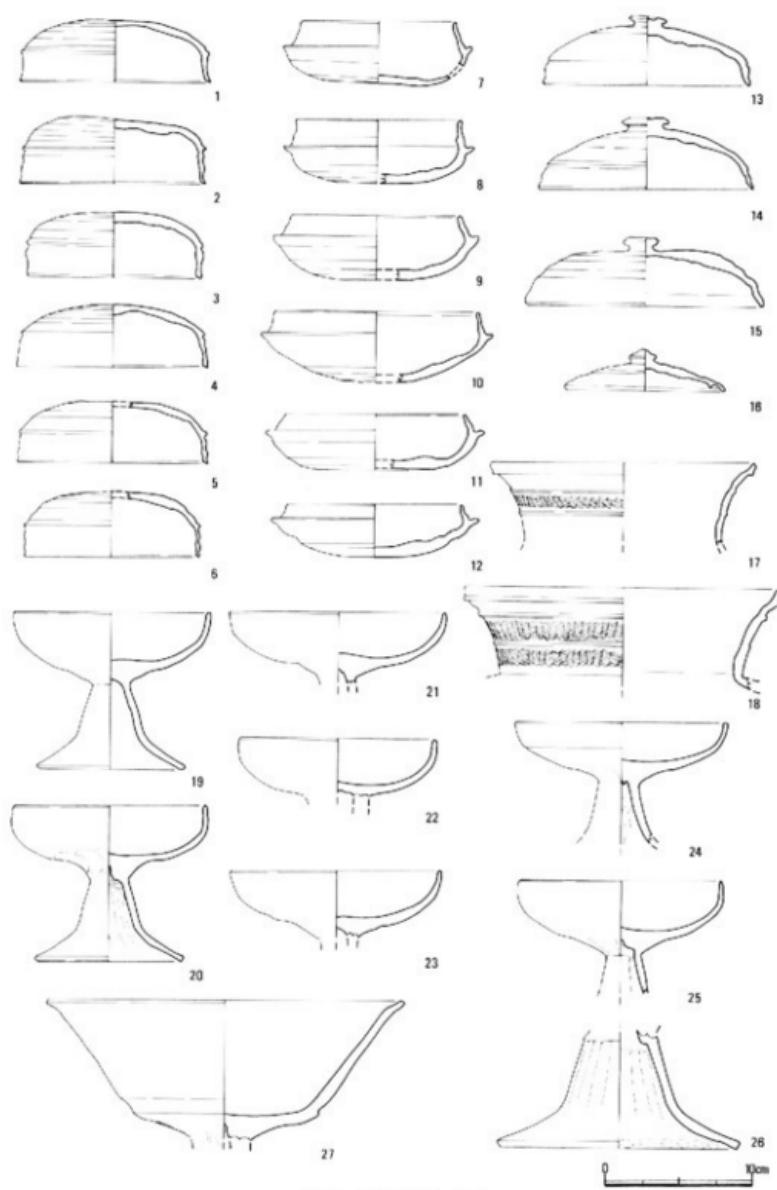


図43 出土遺物（Ⅰ）

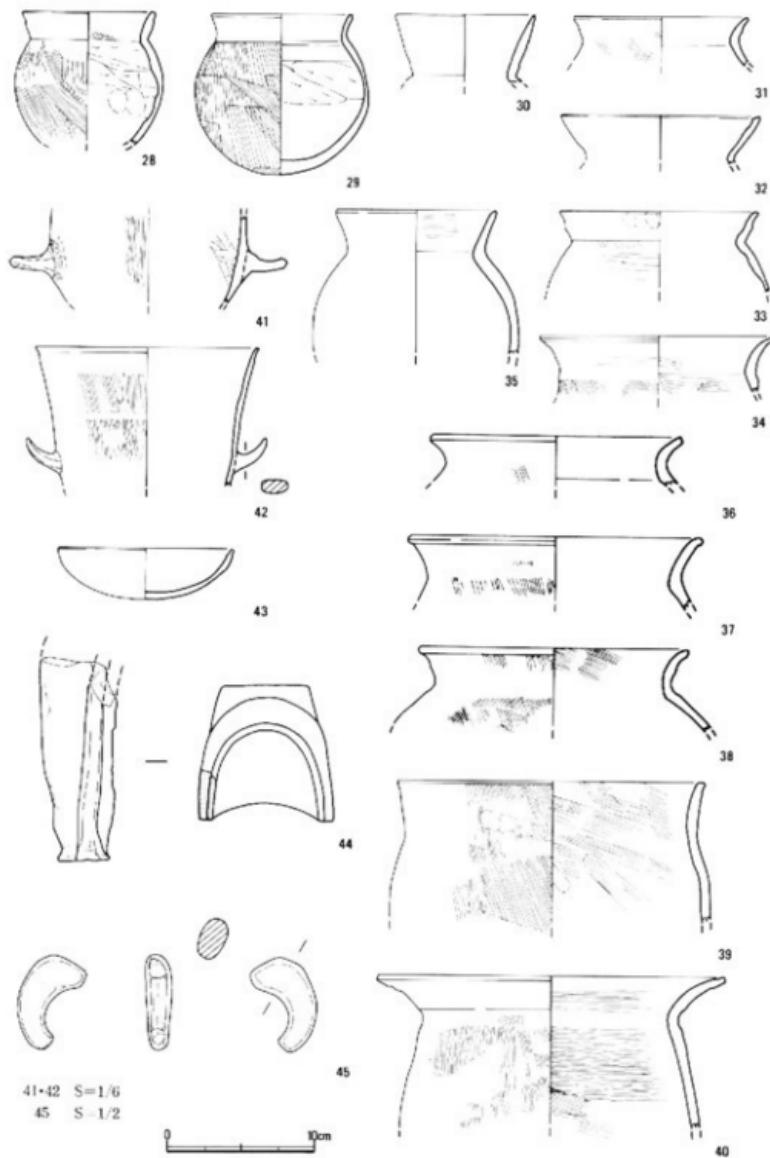


図44 出土遺物（2）

者が若干内傾するものの直立に立ち上がるが、後者は内傾している。これらの特徴から前者はTK216~208型式、後者はTK10前後で、それぞれ5世紀後半、6世紀前半~中頃と考えられる。17・18は須恵器壺である。17は、内外面とも回転ナデ調整が施されている。口縁部は回転ナデによって内面が四んでおり、端部は先端がやや丸くなるが断面三角形状を呈する。また口縁部には突帯が見られ、頸部にかけても2本の突帯が巡る。この突帯の間に細かい波状文が施されている。突帯は回転ナデを利用して引き上げられていると推測できる。18も基本的には17と同様であるが、2本の突帯とくびれ部分とにそれぞれ挟まれて波状文が施されている。時期は5世紀後半頃と考えられる。19~27は土師器高杯である。これらは大きく小型品(19~25)と大型品(26・27)に分けることができる。小型品は口径が14cm前後を測る。調整は、ほとんど内外面とも磨耗・剥離のため観察することはできなかった。また外面の杯部と脚部の接合部には、接合時に施したと考えられる指オサエの痕跡がうかがえる。さらに脚内面には、棒状のようなもので刺突した凹みが観察できる。形態については、杯部はふくらみをもちながら緩やかに立ち上がり口縁部はやや内湾する。脚部は接合部から中太りに下がり、中頃で大きくハの字に開き、端部は面をなす。他方大型品は、口径が24.2cmある。調整については、杯底部の接合部付近でハケメがかすかに看取できる。また一部に回転ナデのような痕跡も見られる。一方内面は磨耗のため調整は観察できない。形態については、円盤状の底部の上から緩やかに逆ハの字状に立ち上がり、口縁部付近でさらに外反し、端部は丸くおさめる。外面には杯部を接合したときの痕跡として、突帯(稜線)が確認できる。26は大型品の脚部と考えられる。接合部から緩やかにハの字状に下がり、中程で大きく外反し、端部は面をなす。外面にはかすかに縦方向のミガキが観察でき、内面は絞り込んだ時に生じたと考えられる筋状の痕跡が確認できる。また端部近くには指オサエの跡が見られる。28~40は土師器壺である(30は壺と考えられる)。28は体部がほぼ球形に近く、体部から口縁部にかけてはくの字形に折れ曲がり、端部は丸くおさめる。29も28と同様の形態を呈するが、体部は28よりも胴張りで、体部のほぼ中心が最大径となる。調整については、どちらも外面口縁部にはナデ、体部にはハケメ、内面口縁部にはヨコハケ、体部にはケズリが施されている。また外面には黒斑が一面に観察できる。30は口縁部が逆ハの字形にやや長く立ち上がり、端部はやや鋭くおさめている。このため壺ではないかと考えられる。調整は外面に回転ナデと思われる痕跡がうかがえる。31は口縁部の一部のみ残存するが、見た目には28・29と同じような形態であると考えられる。32は口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、端部が肥厚する、いわゆる布留壺と見られる。胎土内には数枚の石英片が多く観察できる。33は口縁部がくの字形に短く屈曲し、端部はやや平坦面をもつ。口縁部外面には明瞭な指オサエの痕跡があり、かなり凹凸になっている。34は外面口縁部に回転ナデ、体部にタテハケ、内面口縁部・体部にヨコハケを行っている。形態は口縁部が緩やかに外湾して、

遺物観察表

遺物番号	種類	器種	口径	基高	底径	外周測量	内面調整	外面色調	内面色調	型式	時期	備考
1	須恵器	杯蓋	14.0	4.2		回転ヘラケズリ	回転ナデ	淡青色	青褐色	TK216	5世紀中頃	
2	須恵器	杯蓋	12.9	4.6		回転ヘラケズリ	回転ナデ・不整	青灰色	青褐色	ON-46	5世紀中頃～後半	
3	須恵器	杯蓋	11.8	4.5		回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗青灰色	暗青褐色	TK208	5世紀後半	
4	須恵器	杯蓋	13.2	4.7		回転ヘラケズリ	回転ナデ	淡灰青色	淡灰褐色	TK208	5世紀後半	
5	須恵器	杯蓋	13.0	4.7		回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色	青褐色	TK208	5世紀後半	
6	須恵器	杯蓋	12.1	*4.5		回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰青色・輪行道	灰青色	TK208	5世紀後半	
7	須恵器	杯身	10.5	4.5		回転ヘラケズリ	回転ナデ	淡青色	青褐色	TK216	5世紀中頃	
8	須恵器	杯身	11.2	4.3		回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗青褐色	暗青褐色	TK208	5世紀後半	
9	須恵器	杯身	11.5	4.4		回転ヘラケズリ	回転ナデ?	褐色	褐色	MT15	6世紀初頭	
10	須恵器	杯身	13.9	*4.9		回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・不整	オリーブ灰褐色	淡青色	TK10	6世紀前半	足込部分の同心内文を削るために不整ナデを行なう
11	須恵器	杯身	12.4	3.6		回転ヘラケズリ	回転ナデ・不整	オリーブ灰褐色	オリーブ湖灰色	TK10	6世紀前半	足込部分の同心内文を削るために不整ナデを行なう
12	須恵器	杯身	11.9	3.5		回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	褐色	淡灰褐色	MT85	6世紀中頃	
13	須恵器	杯蓋	14.0	4.6		回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	青灰色	青褐色	TK10	6世紀前半	
14	須恵器	杯蓋	14.6	5.0		回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	淡青色	青褐色	TK10	6世紀前半	
15	須恵器	杯蓋	15.0	4.6		回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒灰色	輪行道	MT85	6世紀中頃	
16	須恵器	杯蓋	10.9	2.8		回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	青灰色	青褐色	TK217・飛鳥田	7世紀中頃～後半	
17	須恵器	蓋	17.9	*5.8		回転ナデ	回転ナデ	オリーブ淡青色	青褐色	TK208	5世紀後半	蓋状文あり
18	須恵器	蓋	21.3	*6.7		回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色	オリーブ青褐色	TK208	5世紀後半	蓋状文あり
19	土師器	高杯	13.4	10.8	10.8	指オサニ・他は不明	不明	明褐色	明褐色		5世紀後半	
20	土師器	高杯	13.0	10.7	9.9	指オサニ・他は不明	不明	淡乳色	褐色		5世紀後半	
21	土師器	高杯	14.7	*5.0		指オサニ・他は不明	不明	褐色	褐色		5世紀後半	
22	土師器	高杯	13.3	*1.0		指オサニ・他は不明	不明	褐色・黒斑あり	淡褐色		5世紀後半	
23	土師器	高杯	4.3	*4.6		指オサニ・他は不明	不明	褐色	褐色		5世紀後半	
24	土師器	高杯	14.3	*8.4		指オサニ・他は不明	不明	褐色・肌色	褐色		5世紀後半	
25	土師器	高杯	13.7	*7.8		回転ナデ・指オサニ	回転ナデ	褐色	褐色		5世紀後半	
26	土師器	高杯		*8.0	16.8	ヘラミガキ	無オサニ・板立ち込み感	褐色	褐色		5世紀後半?	
27	土師器	高杯	24.2	*9.6		回転ナデ・ツバハケ	回転ナデ	褐色	褐色		5世紀後半	
28	土師器	裏	8.9	*9.3		口縁部ハハ・体部ハハ	口縁部ハハ・体部ハハ	褐色・全体的に黒斑あり	青褐色			
29	土師器	裏	9.5	*11.1		口縁部ハハ・体部ハハ	口縁部ハハ・体部ハハ	褐色・全体的に黒斑あり	青褐色			
30	土師器	裏	9.4	*4.6		回転ナデ	回転ナデ	褐色	褐色			
31	土師器	裏	11.9	*3.3		ハケ	不明	褐色	オリーブ褐色			
32	土師器	裏	13.7	*3.3		不明	不明	褐色	オリーブ褐色			
33	土師器	裏	13.6	*5.5		口縁部回転ナデ・指オサニ・ツバハケ	回転ナデ・指オサニ・ツバハケ	淡褐色	褐色		5世紀中頃?	布留妻
34	土師器	裏	16.2	*3.8		口縁部回転ナデ・体部ナメハケ	口縁部コハハ・体部コハハ	オリーブ系褐色	オリーブ系褐色			
35	土師器	裏	10.8	*9.7		不明	不明	淡褐色	褐色			小石多く黒斑あり
36	土師器	裏	17.0	*3.3		口縁部回転ナデ・体部タハケ	口縁部回転ナデ・体部タハケ	淡褐色	褐色			
37	土師器	裏	19.5	*5.0		口縁部凹凸ナデ	口縁部凹凸ナデ	淡褐色	淡黄色			
38	土師器	裏	18.1	*5.5		タハハケ・擁オサニ	タハハケ・擁オサニ	褐色	褐色			
39	土師器	裏	20.9	*10.3		タハハケ	タハハケ	褐色	褐色			
40	土師器	長胴壺	23.7	*10.4		口縁部凹凸ナデ・体部タハケ	口縁部ナデ・ハケ・体部タハケ	英褐色	系褐色			
41	土師器	壺				タハハケ	ケズリ	淡褐色	褐色			
42	土師器	壺	30.6	19.0		口縁部凹凸ナデ・体部タハケ	口縁部凹凸ナデ・体部タハケ	褐色	褐色			
43	土師器	壺	11.9	*3.5		ナデ?	ナデ?	褐色	淡黃一色			

半は残存高

端部は若干引き上げることによって肥厚している。35は、口縁部がくの字状に屈曲し、端部は丸くおさめる。内外面とも磨耗が激しく、また胎上中には石英等の大きな石が見られ、粗雑感がある。37は口縁部が短く外湾する。外面体部にハケメの痕跡がうかがえる。38は口縁部が緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。外面にはハケ、内面の口縁部もヨコハケを施している。39は甕と考えられるが、口縁部と体部のくびれ部分は指オサエによって多少くぼんでいるが、ほぼ寸胴に立ち上がっていく。また端部は面をもつ。外面調整はタテハケ、内面はヨコハケを施している。40は長胴甕である。口縁部は大きく外反する。外面口縁部はナデ、体部はタテハケ、内面口縁部はかすかにヨコハケを観察することができるが、その上からナデしているため明瞭には確認できない。体部は比較的粗いヨコハケが用いられている。体部下半は欠損のため判らないが、現状を観察する限りでは、河内地方の長胴甕ではないと考えられ、他地方からの搬入品と考えられる。41は鍋の把手部分である。把手は、平面が円形に近い椭円形で中央部はくぼんでいる。また裏面には把手先端部に向かってケズリが施されている。一部残る体部は、外面にタテハケ、把手付近は把手に向かって粗いハケが施され、内面は不整方向のケズリが行われている。42は瓶である。体部の中程から底部にかけては欠損している。外面はタテハケで、内面は若干石の動きが観察できるため、ケズリを行っていると考えられるが明瞭には判らない。口縁部は内外面ともナデを行う。43は椀である。内外面とも調整は観察できない。44は甕の底部の一部である。底部分にはハケメが見られ、また内面にもハケメが見られる。45は滑石製勾玉である。形態的には勾玉として完成しているが、目が穿孔されておらず未製品と考えられる。

### まとめ

今回の調査で掘立柱建物1棟、溝、土壙などを検出した。良好な遺物が出土したにもかかわらず、遺構に伴う遺物が少なかったため、各遺構の時期については判断できなかった。ただ出土遺物を観察すると須恵器、土師器とも5世紀後半を中心とした遺物が多く、この時期の共伴関係を知る上で貴重な資料を提供していると言える。須恵器では、杯身、杯蓋が出土遺物のはとんどで数点壺が見られる。杯身、杯蓋はその特徴からTK208型式（5世紀後半）と考えられる。一方土師器には、杯、高杯、甕、瓶、鍋、移動式竈などがある。特に高杯は杯部が丸みを持ち、口縁部が内湾し、脚部は途中から大きくハの字状に外反する小型品と杯部の口縁部が大きく外反する大型品とが見られる。また前者には暗文も見られる。

このように見ると、須恵器の高杯は1点も見られず、また土師器の杯もほとんど見られないことから、須恵器と土師器で器種の使い分けが行われていたと考えることができる。

## 古市遺跡

遺跡は主に弥生時代から近世に至るまでの複合遺跡である。遺跡内には、白鳥神社古墳や飛鳥時代初頭に建立されたと考えられる西琳寺跡などが点在する。特に、中央には東西方向に難波津から大和に至る丹比道（竹内街道）、南北方向には東高野街道が通り、各時代を通して交通の要所として繁栄していた。

地理的には、東に石川、南には旧大乗川が流れしており、これらを臨む低位段丘に位置する。遺跡の南方には標高30~40mの独立丘陵がみられ、そこには高屋築山（安閑陵）古墳や八幡山（春日山田皇女陵）古墳という前方後円墳があり、中世にはこの独立丘陵を活用した日本屈指の規模を有した高屋城が占有している。また、遺跡の北側には上堂遺跡、西側は古墳時代～奈良時代を中心とした菅田白鳥遺跡が隣接している。

過去の調査成果としてさまざまな内容の遺構・遺物が確認されている。中でも、古墳時代中墳の堅穴住居や掘立柱建物や中近世の埋廬遺構や製鉄関係遺構等が注目される。最近の調査では、中近世の遺物・遺構に関する成果が多い。このことは、古市遺跡と高屋城との関係を通して城下町とその軍事的施設について考古学の側面から追求できる資料が蓄積されつつあり、両者における今後の研究に新しい視点が付け加えられてきている。



図45 遺跡内位置図

## 調査の契機と経過

平成3年1月18日付け（羽教社第1508号）で、羽曳野市古市3丁目329番3号において、個人住宅兼集合住宅の建設に伴い発掘届出書が提出された。当該地は、古市遺跡の中心部であり、近隣の事前調査で中近世の遺物包含層や遺構などを確認している所である。

そのため、工事予定箇所においても同様の遺構が検出されることが予測されたため、事前に確認調査を実施することとなった。その結果、表土の下0.25mに焼土層を含む遺物包含層が確認され、現地表面下0.85mでは黄橙色の地山面となり数カ所の遺構を検出することとなった。

これらの成果をもとに申請者と協議した結果、現状保存が不可能なため基礎工事において遺構を破壊する部分について発掘調査を継続して実施することになった。

調査は平成3年4月2日から同月15日まで実施し、現地調査にかかる費用の一部は申請者の負担による。

## 層序と遺構

基礎工事の深い位置に幅2.5m×25mの調査区2箇所を設定し、表土及び搅乱上を重機掘削した後、遺物包含層を人力で除去し、地山面で遺構の精査・検出を行った。

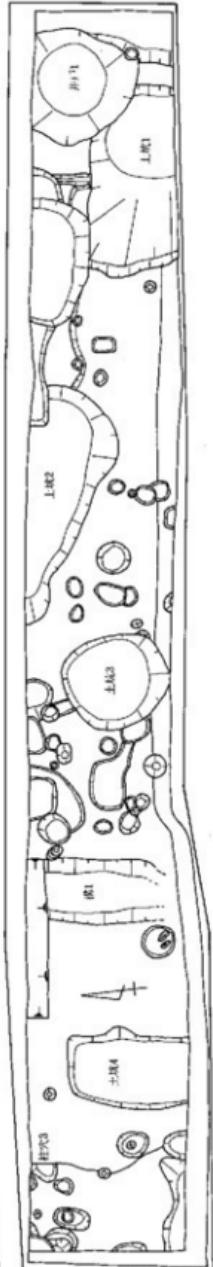
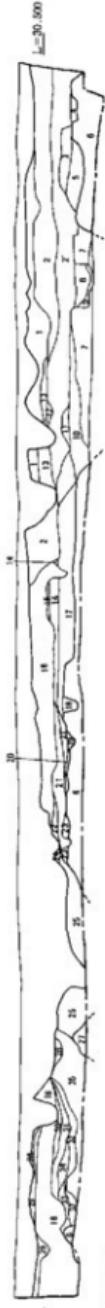
既設建物解体に伴う搅乱部や盛土が厚く、深い所では地山面を大きく掘削するところもある。また、北側調査区と南側調査区では4m離れている程度であるが、地山や堆積層に大きな違いがある。北側調査区では地山面は現地表面下1.0mで黄色系粘質土であるが、南側では現地表面下0.6mで橙色系砂礫となっている。また、北側では焼土層を含む包含層が厚く地山面上に堆積しているが、南側では焼土等が薄く地山面までも浅いため、後世の搅乱による可能性が高い。

## 北トレント

表面から約0.3mで確認された焼土に伴う遺構の検出を試みたが、検出面自体が造成のため場所によって土色や土質が不確定なため、明確な遺構は検出できなかった。そのため、試掘調



図46 調査区位置図

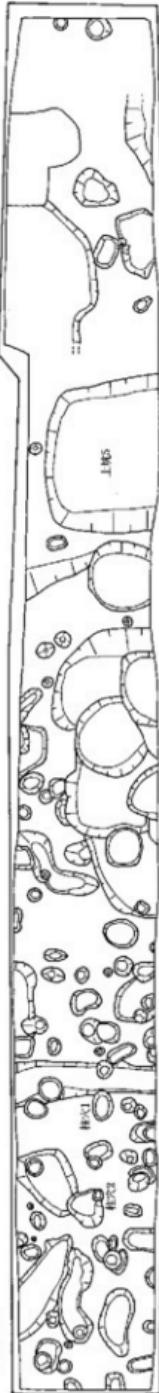


平面及び断面図  
— 62 —

北トレンド	1. 0108 1.2 地下河川上	11. 1075 7.4 地下河川上	21. 1075 5.2 地下河川上	31. 1075 6.2 地下河川上
	2. 0108 0.8 地下河川上	12. 1075 6.2 地下河川上	22. 1075 4.8 地下河川上	32. 1075 5.2 地下河川上
	3. 0108 0.5 地下河川上	13. 1075 5.2 地下河川上	23. 1075 4.5 地下河川上	33. 1075 5.2 地下河川上
	4. 0108 4.1 地下河川上	14. 1075 5.2 地下河川上	24. 1075 4.5 地下河川上	34. 1075 5.2 地下河川上
	5. 0108 3.2 地下河川上	15. 1075 5.2 地下河川上	25. 1075 4.5 地下河川上	35. 1075 5.2 地下河川上
	6. 0108 3.0 地下河川上	16. 1075 5.2 地下河川上	26. 1075 4.5 地下河川上	36. 1075 5.2 地下河川上
	7. 0108 3.2 地下河川上	17. 1075 5.2 地下河川上	27. 1075 4.5 地下河川上	37. 1075 5.2 地下河川上
	8. 0108 6.3 地下河川上	18. 1075 5.2 地下河川上	28. 1075 4.5 地下河川上	38. 1075 5.2 地下河川上
	9. 0108 6.1 地下河川上	19. 1075 5.2 地下河川上	29. 1075 4.5 地下河川上	39. 1075 5.2 地下河川上
	10. 0108 6.1 地下河川上	20. 1075 5.2 地下河川上	30. 1075 4.5 地下河川上	40. 1075 5.2 地下河川上
	11. 0108 5.1 地下河川上	21. 1075 5.2 地下河川上	31. 1075 4.5 地下河川上	41. 1075 5.2 地下河川上
	12. 0108 5.1 地下河川上	22. 1075 5.2 地下河川上	32. 1075 4.5 地下河川上	42. 1075 5.2 地下河川上
	13. 0108 5.1 地下河川上	23. 1075 5.2 地下河川上	33. 1075 4.5 地下河川上	43. 1075 5.2 地下河川上
	14. 0108 5.1 地下河川上	24. 1075 5.2 地下河川上	34. 1075 4.5 地下河川上	44. 1075 5.2 地下河川上
	15. 0108 5.1 地下河川上	25. 1075 5.2 地下河川上	35. 1075 4.5 地下河川上	45. 1075 5.2 地下河川上
	16. 0108 5.1 地下河川上	26. 1075 5.2 地下河川上	36. 1075 4.5 地下河川上	46. 1075 5.2 地下河川上
	17. 0108 5.1 地下河川上	27. 1075 5.2 地下河川上	37. 1075 4.5 地下河川上	47. 1075 5.2 地下河川上
	18. 0108 5.1 地下河川上	28. 1075 5.2 地下河川上	38. 1075 4.5 地下河川上	48. 1075 5.2 地下河川上
	19. 0108 5.1 地下河川上	29. 1075 5.2 地下河川上	39. 1075 4.5 地下河川上	49. 1075 5.2 地下河川上
	20. 0108 5.1 地下河川上	30. 1075 5.2 地下河川上	40. 1075 4.5 地下河川上	50. 1075 5.2 地下河川上
	21. 0108 5.1 地下河川上	31. 1075 5.2 地下河川上	41. 1075 4.5 地下河川上	51. 1075 5.2 地下河川上
	22. 0108 5.1 地下河川上	32. 1075 5.2 地下河川上	42. 1075 4.5 地下河川上	52. 1075 5.2 地下河川上
	23. 0108 5.1 地下河川上	33. 1075 5.2 地下河川上	43. 1075 4.5 地下河川上	53. 1075 5.2 地下河川上
	24. 0108 5.1 地下河川上	34. 1075 5.2 地下河川上	44. 1075 4.5 地下河川上	54. 1075 5.2 地下河川上
	25. 0108 5.1 地下河川上	35. 1075 5.2 地下河川上	45. 1075 4.5 地下河川上	55. 1075 5.2 地下河川上
	26. 0108 5.1 地下河川上	36. 1075 5.2 地下河川上	46. 1075 4.5 地下河川上	56. 1075 5.2 地下河川上



南トレンド



査で確認した、地山面まで下げるこの面で遺構の検出を行った。

確認できた遺構は、出土遺物から中世から近世に属するもので井戸・土坑・溝・柱穴などが中心である。

井戸 1 は直径2.0mを測り、埋上からは伊万里茶碗を中心に多数の遺物を出土しており、井戸の埋戻しに際して中央部に竹筒を入れた祭祀を行ったとみられ、やや朽ちた竹材が確認された。完掘は行わなかった。

土坑 1 は幅3.1m・深さ0.5m程度の規模であるが、底部では焼土に混じり、藁か穀状の有機質が焼けた状態で検出された。また、土坑 2 では埋土内に人頭大の石が密に込められており、埋土から韓式系櫃の把手部分が出土している。

土坑 3 は平面円形のもので直径1.7~1.9mを測り、椭鉢状の底部を有する。埋上からは土師質小皿などが出土地している。

土坑 4 は長方形を呈し、南側は調査区外となる。幅約1m・長さ2.2m以上の規模で、壁面は垂直に近い。また、埋上は緑灰黄色粘質土であり、須恵器杯身(8)が出土している。

調査区の西側では幅1.2mの溝を検出した。当調査くでは明瞭に確認されたが、南調査区では検出されなかったことから、方向を大きく変えて西若しくは東へ走行するものと思われる。

#### 南トレンチ

段丘礫面である地山で、多数の遺構を検出した。特に、西半部では柱穴が多く確認された。しかし、調査区の幅に制約があるため、この幅では建物を復原するには至っていない。また、各柱穴から出土する遺物も古墳時代から中近世のものがあり、切り合ひも多いことから更に検討を要するものであった。

柱穴以外では、調査区の東側で2.2m以上×2.8mの平面長方形を呈する大型の土坑で、深さ0.8m以上のものである。

#### 遺 物

焼土層下の整地層及び包含層をはじめ、地山上の包含層などからコンテナーにして約20箱の遺物が出土した。特に、上層での近世の陶磁器や瓦類は半数以上をしめる。

現時点では、遺構の性格やつながりについて検討中であり、遺物についても十分な結論を得られていないが、遺構出土遺物を中心に以下に概要記す。

1~6 は土師器である。1 はミニチュア高杯で、口径8.6cm・器高6.3cmを測る。平底の杯部から上外方へ開口部を有する。外面の杯部と脚部の境目にある継ぎ目をハケによって消している。2 の高杯脚部は直立した柱状のもので外面には丁寧なヘラミガキが施されている。器部の内面には絞り目が認められる。3・4 は壺の二重口縁部である。3 は頸部から大きく外反

して開き、一重目の口縁からさらに外反する二重目の口縁部を有する。口径は19.0cmを測り、口縁部の外面はナデによって成形する。また、内面にはヘラミガキの痕跡があるが磨耗のため不明瞭である。南側トレンチの柱穴1から出土している。4は口縁端部の外面及び一段目との境目部分に円形浮文を貼り付け、竹管により施文する。復原口径21.0cmを測る。5は鉢で球形の底部から内湾しながら上に開く口縁部を有し、端部は内傾させて丸くおさめ、口径14.4cmを

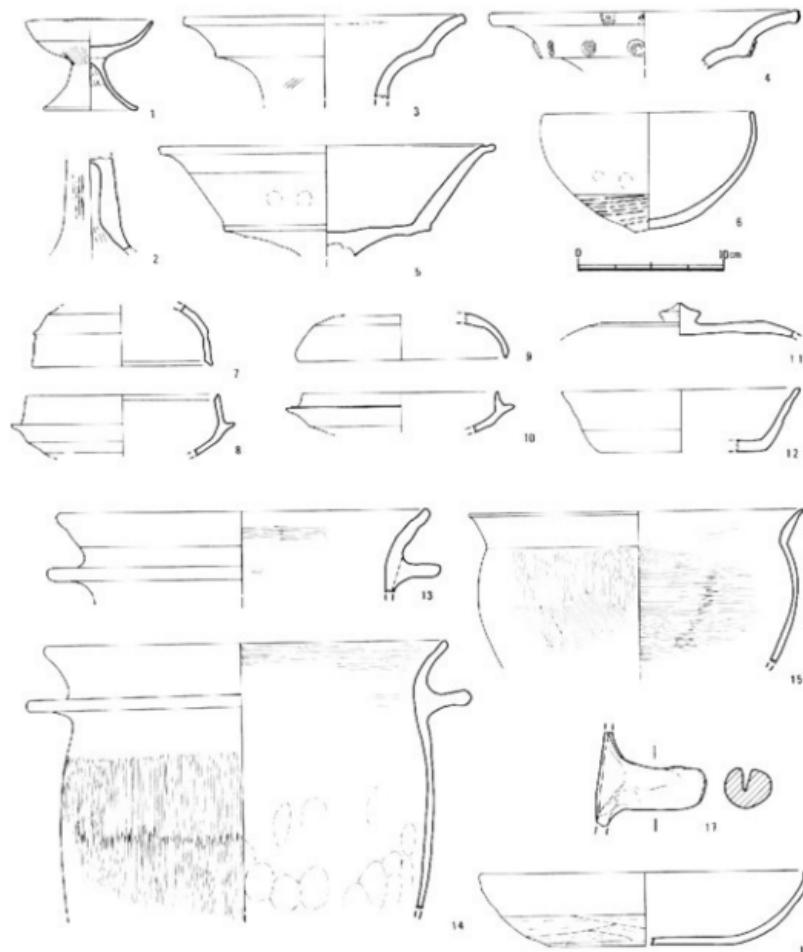


図48 出土遺物（1）

測る。底部は著しく形骸化した高台が認められる。外面の上2/3は磨耗のため調整は不明であるが、下1/3はタタキによる調整である。

7～12は須恵器である。7は口径12.2cmを測る。直立に近い口縁部を有し、端の内面には段を有する。外面の天井部と口縁部の境目にはにぶい段がある。内外面ともロクロナデによる成形である。8は口径13.0cmの杯身で、やや内傾気味の口縁部が立ち上がり、端部内面に段を有する。受け部は水平に開く。いずれも田辺編年のMT15段階のものと思われる。

9の杯蓋は、復原口径14.2cmで天井部から内彌氣味に垂下する口縁部を有し、端部は丸くおさめる。天井部外面はヘラケズリを施し、口縁部はナデ調整である。10の杯身は口径13.3cmで短く立ち上がる口縁部を有する。底部から受け部付近まではヘラケズリを施し、受け部などはロクロナデである。いずれも田辺編年のTK209～217段階のものと思われる。

11は宝珠つまみを有する蓋で天井部外面はヘラケズリ、内面はナデによって成形する。天井部はほぼ水平を保つ。12は口径16.2cm・器高4.25cmの杯Aである。平らな底部から上外方へ直線的に開く口縁部を有する。口縁部の外面はナデ調整が強いためやや凹凸がある。底部外面は未調整であるが立ち上がり部分はヘラケズリを施す。平城宮第III期頃と思われる。

13・14は長胴形の羽釜である。13は復原口径25.0cmを測り、外反気味に開く口縁部を有する。やや厚手で外面はナデによって段を有する。口縁部内面には横方向のハケ目が認められる。鍋は水平に取り付く。14も口縁部の形態は13と同様である。胴部は筒形で外面は縱方向のハケ(7～8本/cm)調整で、内面は指押さえのみである。15は土師器の甕で口径20.8cmを測る。球形の体部から外方に聞く口縁部を有し、端部はわずかにつまむ。頸部から口縁部にかけてはやや内側に肥厚する。体部は内面は横方向、外面は縱方向のハケ調整を施している。16は土師器杯Aで口径28.6cm・器高5.0cmを測り、平らな底部から内彌氣味に立ち上がる口縁部を有し、端部は丸くおさめる。内面及び口縁部の外面はナデ調整であるが、底部外面から口縁部下半部はヘラケズリを施す。

17は韓式系の櫃の把手部分で、体部から水平に取り付く。把手部分は直徑約3.0cmの筒状で上面からV字状の切れ込みが入る。

18～20は土師質皿である。18はいわゆる「ヘソ皿」で底部が内側へ凹む。灰白色系で、口径7.6cmを測り、この種の小皿が多く出土する。19も小皿であるが、平らな底部から短く聞く口縁部を有する。色調は18とは違い橙色系を呈する。20は口径11.0cmの中皿である。平らな底部から外反気味に口縁部が聞く。外面は下半部から底部は指押さえであるが口縁部付近から内面はナデ調整である。21～29は瓦器碗である。いずれも内面見込み部分に数条の圓線状暗文を施すのみで、外面は口縁部がヨコナデで以下は未調整である。そのうちで21～26は口径が10～13cm・器高が3.0cm未満のもので、高台を有しない。27～29は口径11.5～12.0cm程度で、著しく

形骸化した高台を貼り付ける。これらの特徴から、瓦器椀は尾上編年のIV—2～3期の相当するものと考えられる。30は瓦質の鉢で口径23.6cmで内面には横方向の暗文を施す。外面はほとんど未調整であるが、口縁部は強いナデによって体部より薄く仕上げる。31は瓦質の香炉で三方に短い脚を有する。外面は縦方向に丁寧なヘラミガキを施し、灰色を呈する。更にヘラによる花文を描く。32は青磁椀で口径14.4cmを測り、外面には細線の線描蓮弁文を施し、山形の劍頭を描く。

33は瓦質の羽釜の口縁部である。口径24.6cmを測り内傾する口縁部を有し、端部は外側に屈曲させておさめる。34は瓦質大甕の口縁部である。復原口径36cmで、体部から内傾する口縁部を有し、端部は大きく反り返して玉縁状になる。体部の外面はタタキ、内面はハケ調整を施し、外面の玉縁部の下はタタキ目をナデによって消している。35～37・39は瓦質の羽釜である。35は口径20.0cm、内傾する口縁部を有し、外面にはナデにより段をもつ。また、把手を通す孔が穿たれている。体部の外面はヘラケズリを施し、内面はハケ調整である。36の羽釜は口径26.0cmで直線的に内傾する口縁部を有し、外面には二段の段をもつ。鍔はナデによって薄く水平に取り付けるが、上面には粘土の補塗が多く口縁部が断面三角形を呈する。体部の内面はハケ調整で、外面はヘラケズリである。37は口径30.0cmで長方形の口縁部を有し、外面には三段の段をもつ。鍔は先端がやや下に向く。内面は細かなハケ調整である。

39は口径36.0cmのやや大型の羽釜である。直線的な体部からやや内湾気味に内傾する長い口縁部を有し、外面には明瞭な段をもつ。38の甕の口縁部は、口径26.4cmを測る。頸部から大きく外反する口縁部を有し、端部は水平方向へ開く。また、端部上面はナデによって凹む。体部の外面はタタキ調整であり、東播系の須恵質甕と思われる。

40は插鉢で、柱穴2から出土し復原口径22.4cmを測る。平底から直線的に開く体部で、口縁は直立する。口縁の下端はナデによって垂下させ、外面には段を有する。体部外面の中程から下部にかけて粘土継ぎの痕が認められるがナデによって消している。胎土には長石粒が多く、丹波焼きのものと思われる。

41～54は伊万里焼で、皿・椀・湯飲み椀・広東椀などが出土している。概してくらわんか的な日常雑器と目されるものである。文様には草花文・梅折枝文・四方摩文・二重網目文・菊散らし文・水玉文等を描く。50のように内面見込み部分に龍を描くものがある。また、内面見込み部分にはコンニャク印判による五弁花文を施したり、高台の見込みには「寛永通宝」(50)「太明年製」(42)や渦福などの銘が施されている。45・46は外側は青磁で内面の口縁部に四方摩文が巡る。47は尻須の色が薄く、素書き風である。内面の口縁部付近には雷文を巡らせる。51は平底から直立する口縁部を有する。高台は短く、蛇の目凹形高台を呈する。

55～57は界插鉢である。55は北トレンチの柱穴3から出土し、口径27.4cm・器高10.4cmのや

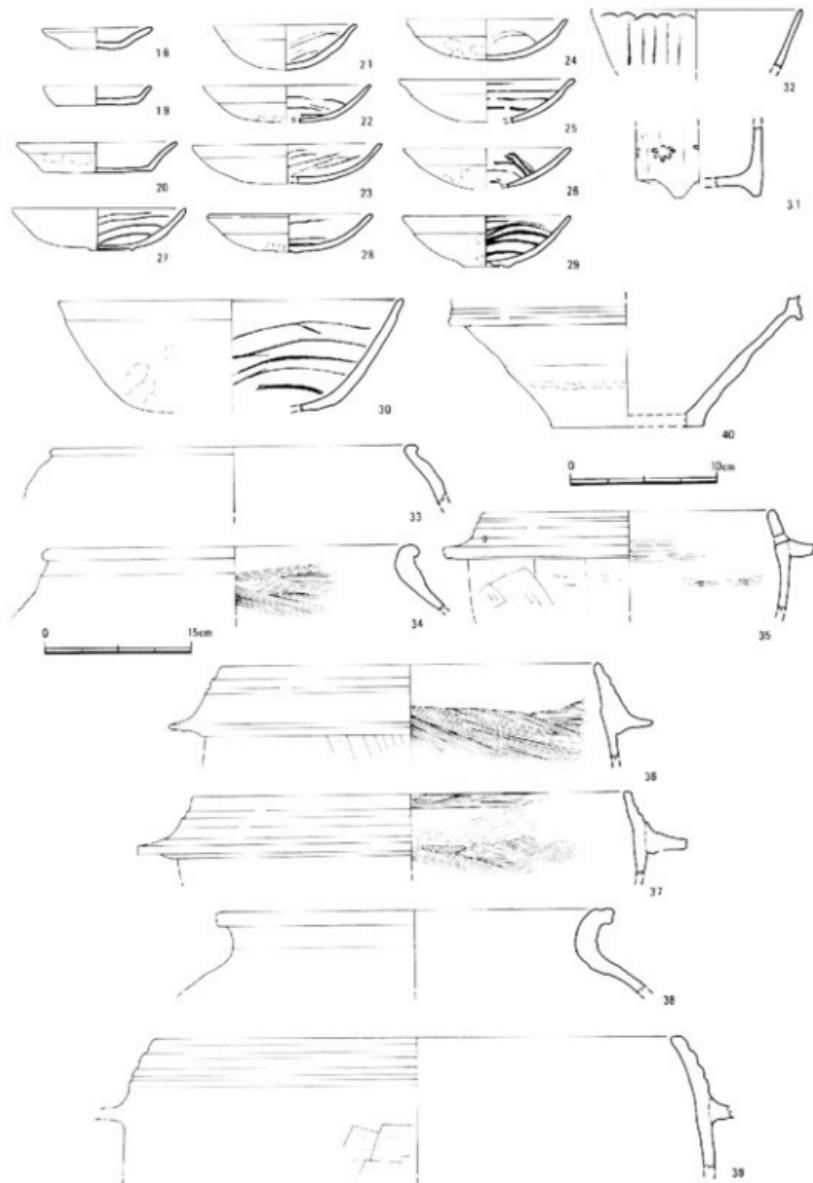


図49 出土遺物（2）



図50 出土遺物（3）

や小型のものである。わずかに中心部が凹む平底から外方に開く体部を有し、口縁部は短く直立する。端部の内面には突出度の高い段が付き、外面には二条の凹線が巡る。また、色調は赤褐色を呈し、内面の摺り目は密に施し、外面はヘラケズリによる。片口が付く。56は口径33cm、

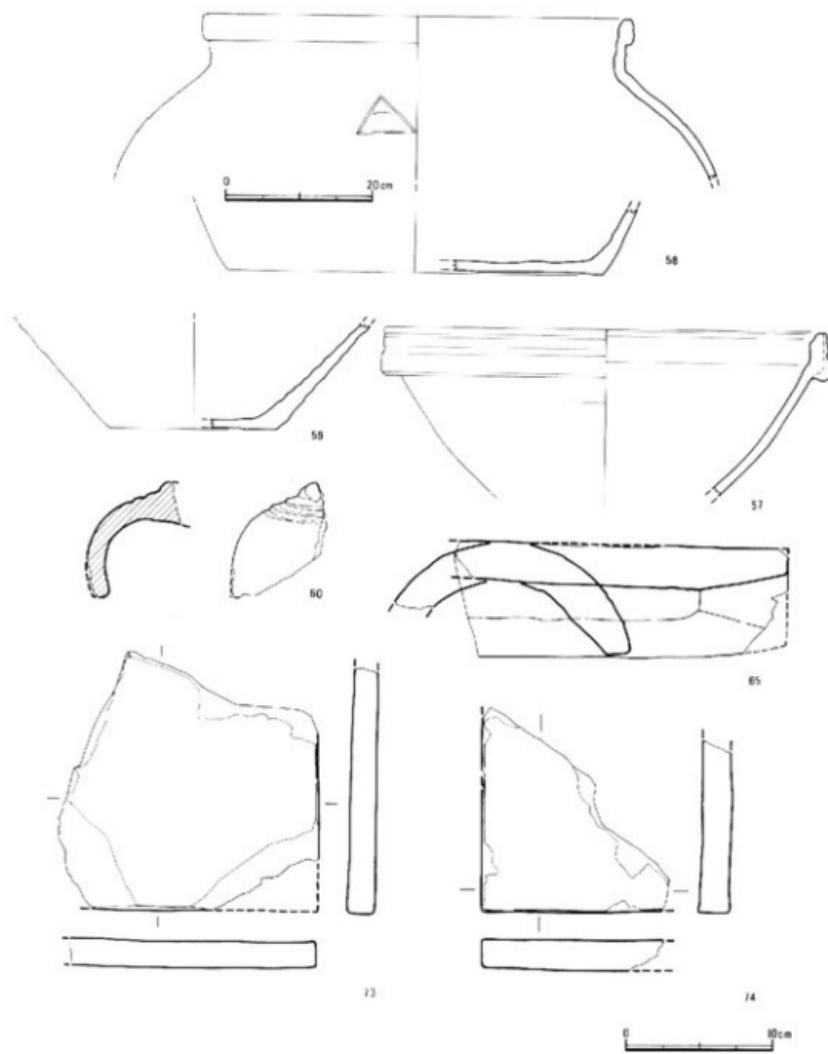


図51 出土遺物 (4)

57は29.4cmを測るもので55と同じ形態であるが、口縁部内面の段の突出度が低い。白神氏の分類では、口縁部の形態はⅠ類であるが、体部などの形態はⅡ類に近い。

58は備前焼の大甕で、肩の張らない体部から直立する口縁部が直立する。口縁端部は外側へ折り返し、偏平で幅の広い上縁口縁となる。復原口径で56.8cmを測る。また、片部には窯印と思われる三角形と中に横線の入るヘラ描きがある。なお、同一個体と思われる。平底部がある。59は備前焼の插鉢で、内外面とも強いナデにより凹凸が残る。

瓦類の出土も多いが、大半が近世瓦であった。そのうち61・69は奈良時代の瓦である。61は均整唐草文軒平瓦（平城宮6721式）で頸部等が欠損する。左端分に見られる危傷の位置から、西琳寺痕出土の軒平瓦と同范と思われる。二次焼成を受け黄褐色に変色している。69の平瓦も凸面には深い縄目タタキを施し、凹面にはナナメコビキ痕と布目が残る。

62は三ツ巴文の軒丸瓦で、外区の内縁と外縁に圓線を有する。珠文の突出は高く、巴の尾があまり巻かない。丸当面に外反して取りつき、やや小型であることから道具瓦と考えられる。

63・64の軒丸瓦は、瓦当部が薄く作られている。63は巴文の尾が長く延びて内区外縁の圓線となる。64は、巴文と珠文で圓線は施さない。

丸瓦では玉縁が付くものと付かないものが混在する。65の丸瓦は凹面にはコビキ痕と布目が残る。広端部や側面の面取りが深く施されている。66は玉縁が付くものであるが、凸面は丁寧なヘラミガキを施す。凹面にはナナメコビキ痕と布目が残る。68の凹面には叩き板による強い調整痕があり、凹凸が残る。端部の内側の面取りは深く、側面の面取りも丁寧に施す。凸面には印刻があり「南瓦□」とある。60は道具瓦で隅留瓦とみられ宝珠形である。

70は軒平瓦は中心に若葉を配し均整唐草文で、脇区幅は4.5cmを測る。頸の厚みは薄い。

71・72の平瓦は、凹面はコビキ痕と布目、凸面はコビキ痕と縄目が認められる。出土した平瓦の大半がこのような特徴を示す。

73・74は壺で、全体の規格寸法は不明である厚みは1.8cmを測る。両面ともほぼ平滑に仕上げ側面はヘラケズリによる調整を行う。出土した壺の大半がこのタイプであるが、この厚み以外に3.2cmを測る厚手の壺も出土している。

### まとめ

遺構については、調査範囲の制約もあり、十分にその性格や所属時期を判断する成果は、今後遺物の整理を継続するなかでの課題である。

古市町内での発掘調査では、焼土層などが確認されており、これが南側に隣接する高屋城を織田信長が攻める際に、古市の町屋も焼き討ちしながら進んだとあることに起因する可能性もあり、出土遺物により焼土の時期を確認する作業が必要である。

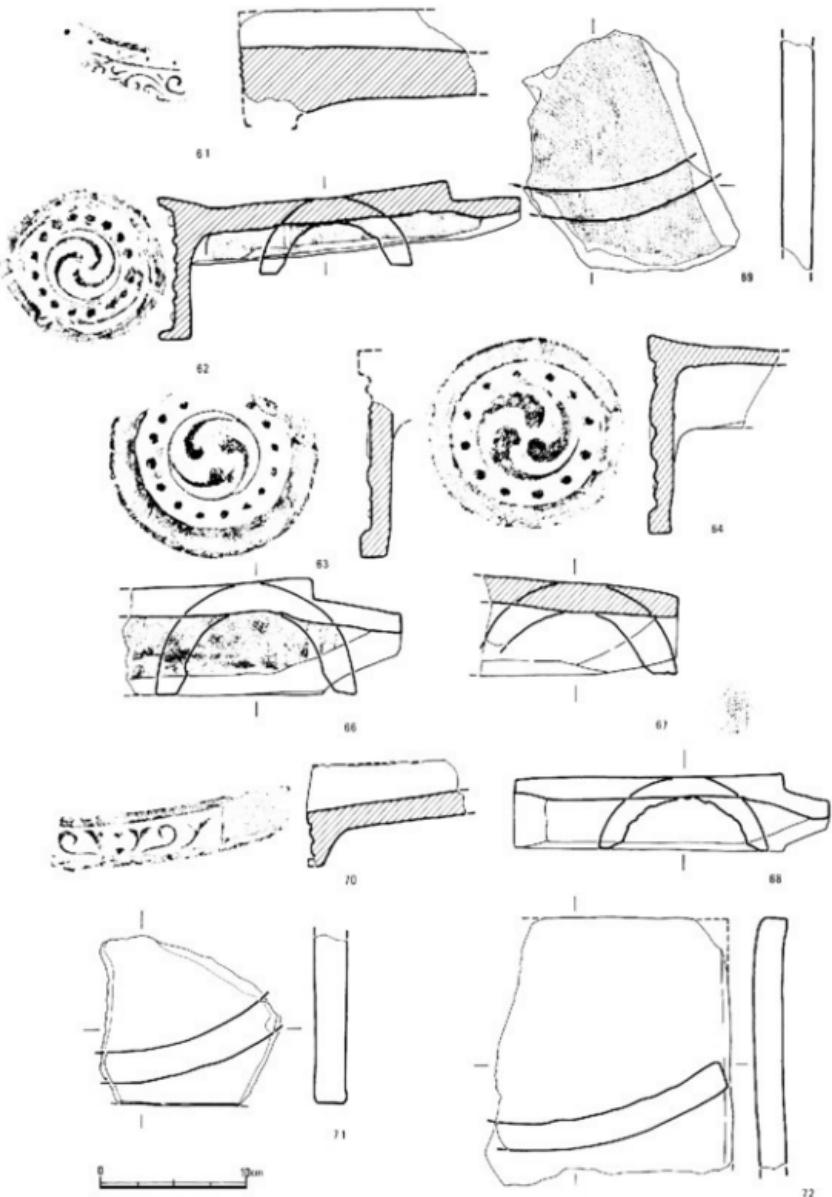


図52 出土遺物（5）

また、出土した瓦器椀の一括などの時期からすれば、中世中頃で高屋城が機能する以前の遺物などが確認できたこととなり、中世に継続して存在していた古市集落が、高屋城の築造後も存続しており「城下町」として発達してきた過程を考古資料の上から検討できるものと思われる。一方、江戸時代の伊万里椀などの遺物も豊富であり、高屋城が廃絶したあとも古市は独自に栄えていたことが窺える。

急速に姿を変えつつある古市の町並みであるが、消える家屋の地下での調査を重ねることで中近世を代表する遺跡として多くの成果を得て、当時の繁栄振りを復原する資料としたい。

## 参考文献一覧

### 株山遺跡

- 堅田 直監修 「二上山シンポジウム—旧石器遺跡をめぐる諸問題」 1981  
大阪府教育委員会 「羽曳野市所在株山遺跡の調査」『南河内遺跡群発掘調査概要III』 1990

### 茶山遺跡

- 羽曳野市教育委員会 『古市遺跡群IV』 1982  
羽曳野市教育委員会 『古市遺跡群V』 1984  
大阪府教育委員会 『石川左岸幹線管渠築造遺跡群 発掘調査概要II』 1987  
羽曳野市教育委員会 『羽曳野市内遺跡調査報告書—平成2年度—』 1991

### 古市大溝

- 羽曳野市教育委員会 『古市遺跡群X』 1989  
羽曳野市教育委員会 『羽曳野市内遺跡調査報告書—平成2年度—』 1991

### 東阪田遺跡

- 羽曳野市史編纂委員会 『羽曳野市史 別巻 古絵図・古地図』 1985  
原 秀穎 「古代の『古市大溝』に関する地理的研究」『人文地理31-1』 1979  
羽曳野市教育委員会 『東阪田遺跡—1980—』 1980

### 高屋築山古墳・高屋城跡—第1区

- 羽曳野市教育委員会 『古市遺跡群VI』 1985  
羽曳野市教育委員会 『古市遺跡群XI』 1990

### 高屋築山古墳・高屋城跡—第2区

- 大阪府教育委員会 『高屋城跡発掘調査概要V』 1979  
大阪府教育委員会 『高屋城跡発掘調査概要VI』 1980  
羽曳野市教育委員会 『古市遺跡群VI』 1985

#### 野々上遺跡・野中ボケ山古墳

大阪府教育委員会	『允恭陵古墳外周溝・長持山古墳の調査—国府遺跡80-2区』	1980
大阪府教育委員会	『允恭陵古墳外堤の調査—国府遺跡80-3区』	1981
大阪府教育委員会	「羽曳野市仁賢陵古墳外堤及び野々上遺跡試掘調査報告」 『節・香・仙第28号』	1981
藤井寺市教育委員会	『古市古墳群』	1986

#### 郡戸地区における確認調査

羽曳野市教育委員会	『古市遺跡群IX』	1988
羽曳野市教育委員会	『羽曳野市内遺跡調査報告書—平成2年度—』	1991

#### 恵我之荘遺跡

坪之内 徹	「韓式土器と7世紀の土器」『韓式系土器研究II』	1989
中西克宏	「須恵器出現期の土師器」『紀要I (明東大阪市文化財協会)』	1985
羽曳野市教育委員会	『古市遺跡群X』	1989
羽曳野市教育委員会	『羽曳野市内遺跡調査報告書—平成元年度—』	1990

#### 古市遺跡

羽曳野市教育委員会	『古市遺跡群II』	1991
羽曳野市史編纂委員会	『羽曳野市史 別巻 古絵図・古地図』 『別冊・太陽No.63 古伊万里』	1985 1988
羽曳野市教育委員会	『羽曳野市内遺跡調査報告書—平成元年度—』	1990
大阪府教育委員会	『八尾南遺跡発掘調査概要・II』	1991
米田敏幸	「中南河内の『布留系』土器群について」『考古学論集第三集』	1990
白神典之	「堺播鉢について」『堺環濠都市遺跡(SKT79) 発掘調査報告』	1988

# 図 版



調査区全景（北東から）



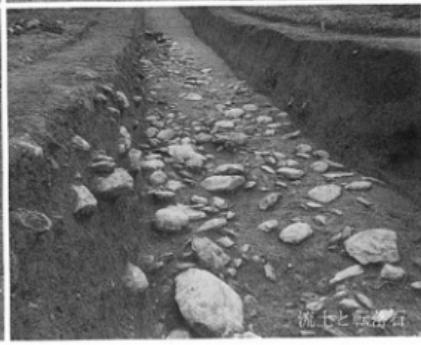
調査区全景（南西から）



第4トレンチ・谷筋

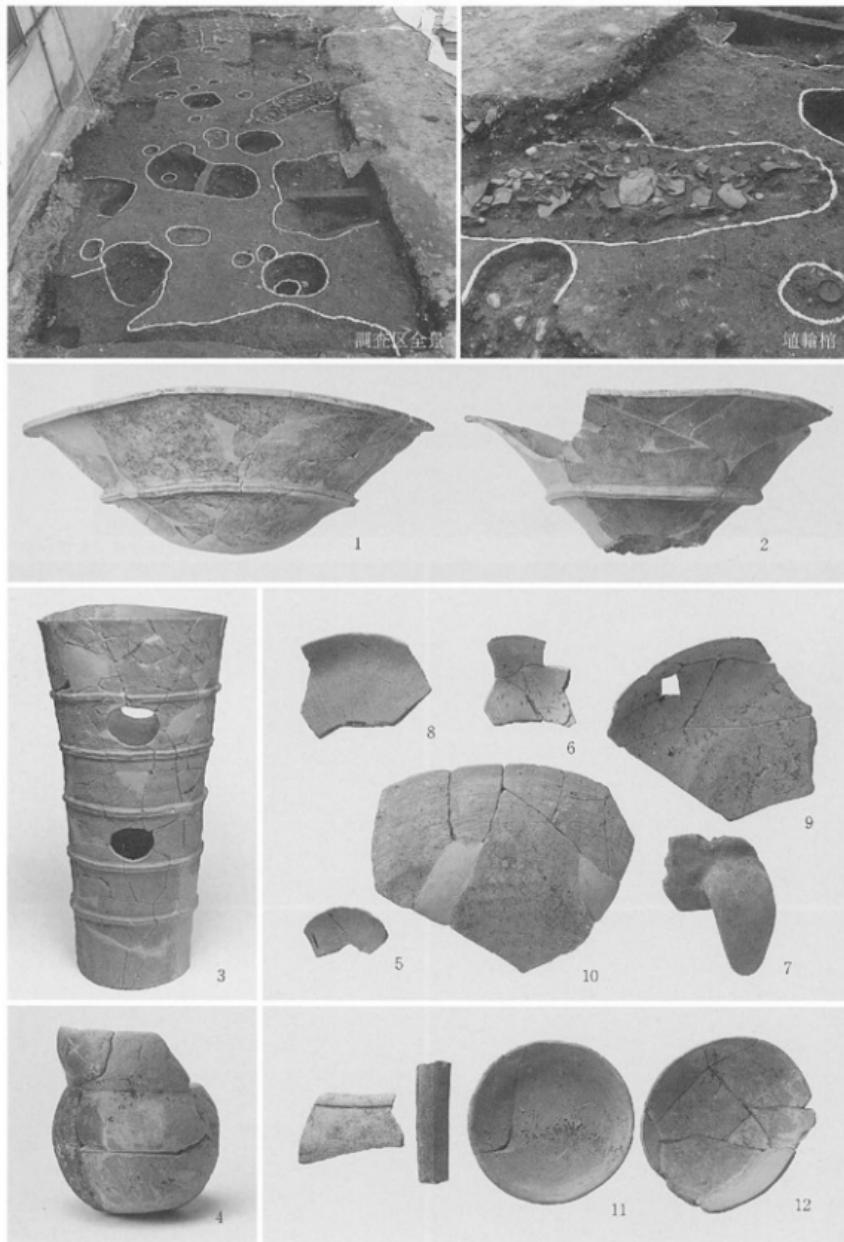


第5トレンチ・尾根筋



流水と石

图版二 茶山遗址·第2区





▲ 第1調査区



堤部分の盛工

第2調査区 ▼



圖版四  
古市大溝跡  
第2區



▲ 第4區



第2區

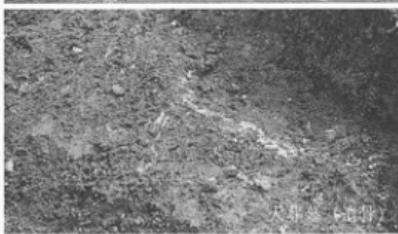
▼ 第3區



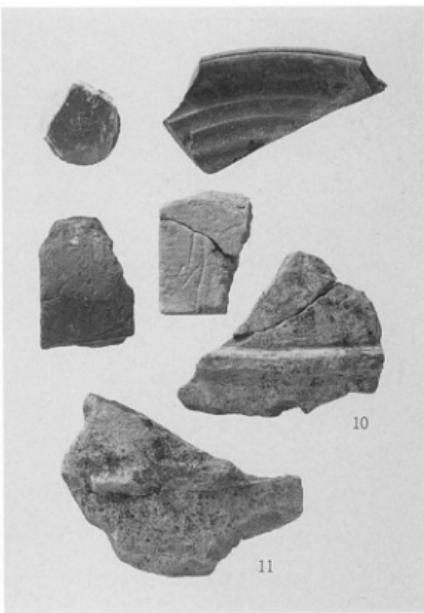
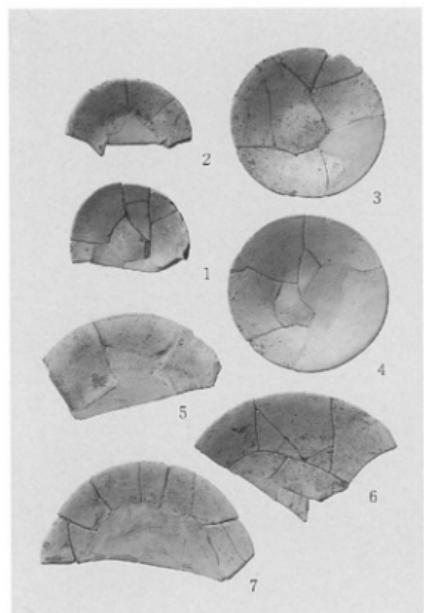
火葬層



火葬場(人骨)



火葬場(人骨)



図版六  
野々上遺跡・野中ボケ山古墳



トレンチ全景（北西より）



トレンチ全景（東より）



遺物 (1)

図版八  
野々上遺跡・野中ボケ山古墳



6



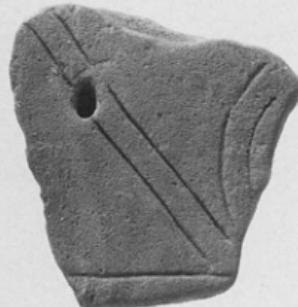
7



8



9



10

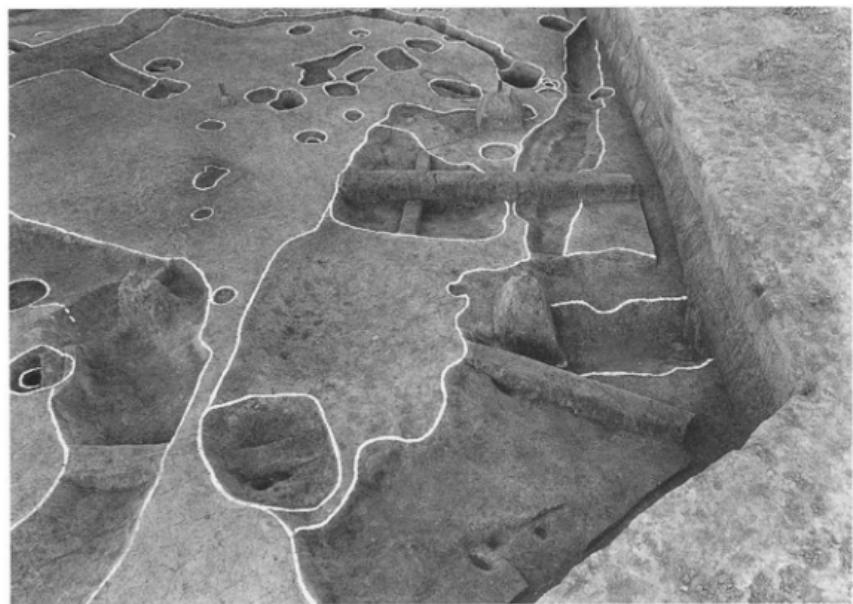


11

遺物（2）



全景（西から）



落ち込み（南から）



7



25



4



20



3



45



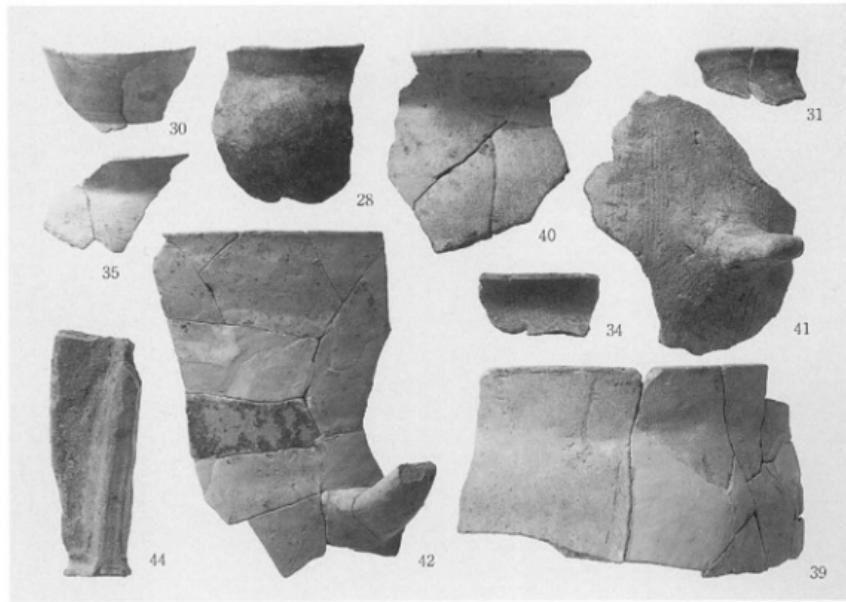
19



29



27



遺物（2）



▲北トレンチ全景（東から）



北トレンチ層序



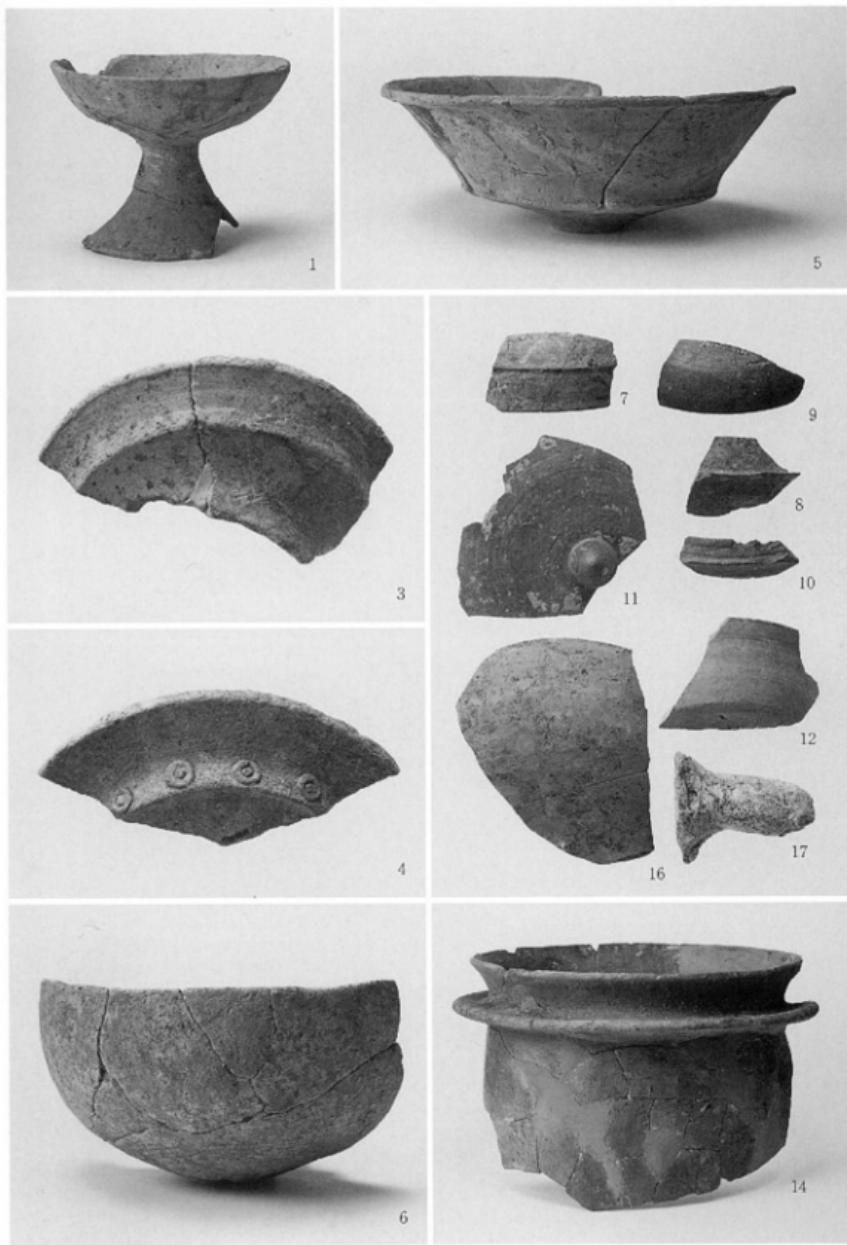
北トレンチ層序

▼南トレンチ全景（東から）▼

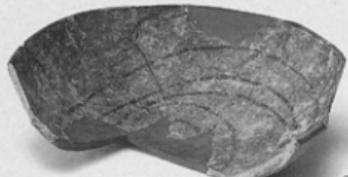
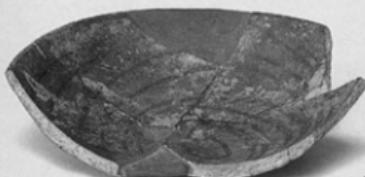
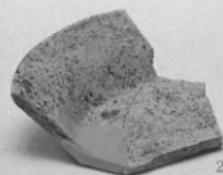
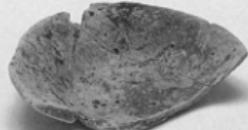


南トレンチ層序

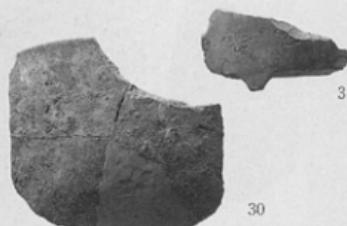




遺物（1）



27



31



34



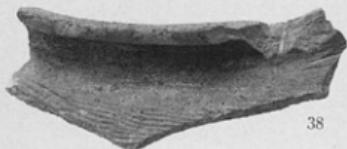
37



36



35



38



58



55



56

遺物（3）



62



63



66



61



59



40

羽曳野市内遺跡調査報告書－平成3年度－

羽曳野市埋蔵文化財調査報告書27

発行 羽曳野市教育委員会

社会教育課 文化財保護係

羽曳野市白鳥3丁目147

0729-57-1221

1992年3月31日発行

印刷 株中島弘文堂印刷所

